

第2章 位置と環境

奈和・尺度・高住・新井の6郷が記載されるが、旧中山町域は東積・汗入の2郷が相当する。汗入郡衙の位置については明らかになっていない。

当該地からやや離れた琴浦町内には山陰地方唯一の国特別史跡である斎尾廃寺がある。金堂や塔、講堂跡が残り、これらを取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸は伯耆国八橋郡の中心地であったと推定されている。大山町東部では、小松谷遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡、樋口西野末遺跡(132)、八幡遺跡(琴浦町八幡)で掘立柱建物跡が確認されており、田中川上遺跡(81)では溝から8世紀前半の須恵器・土師器がまとまって出土している。細工塚遺跡、樋口西野末遺跡(132)では大型の掘立柱建物群が検出されるとともに墨書土器、転用硯等が出土しており、平安時代の官衙関連遺構か有力層の建物と想定される。

生産遺跡も確認されており、栃原窯跡(41)は須恵器窯と考えられるが、上寺谷たたら(42)の製鉄炉やその周辺での鉄滓表採事例などから、炭窯の可能性も指摘されている。下市築地ノ峯東通第2遺跡(34)では、平安時代の須恵器窯3基、製鉄炉1基、炭窯多数が検出されている。殿河内ウルミ谷遺跡では、調査区周辺に須恵器窯の存在を示す遺物が多量に検出された。赤坂小丸山遺跡(139)では製鉄炉1基のほか、それに接続する道路が検出された。大山町名和の名和下菖蒲谷遺跡では、時期は不明であるが古代山陰道推定路線上で道路状遺構を確認したほか、小竹下宮尾遺跡(118)でも道路状遺構が検出されている。

大山に築かれる大山寺は、密教隆盛とともに信仰の中心的な役割を果たし、地方豪族に並ぶ僧兵勢力を有すようになる。

中世 律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。琴浦町南部には標高615mの船上山がそびえる。ここには南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡(国史跡)がある。旧名和町域には、名和氏に関する旧跡が認められる。集落遺跡では、南原千軒遺跡、倉谷西中田遺跡(120)では方形館跡や鍛冶関連遺構・遺物が出土した。殿河内ウルミ谷遺跡では、旧河川から精錬鍛冶滓や板屋型羽口が多量に出土しており、調査区周辺に大規模な鍛冶関連施設が存在するものと推察される。また、中世城館が各地に残り、籠津豊後守敦忠の居城とされる石井垣城跡(72)、天守山城跡(82)、條山城跡(琴浦町太一垣)、大仏山城跡(琴浦町宮木)がある。また、長野城跡(46)・籠津城(檜城)跡(82)など日本海沿岸部にも砦跡が築かれている。門前鎮守山城跡(108)では、大規模な土塁・堀切が検出されている。

なお、籠津豊後守敦忠によって1357(延文2)年に開基されたと伝えられる金龍山退休寺は、近世を通じて曹洞宗の大寺院として隆盛を極め、周辺には参詣道の痕跡や一丁地蔵が今も残っている。

この時代の特徴的な石造物として、琴浦町内の海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期と推定される宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔が7基確認されている。

【参考文献】

- 中山町誌編集委員会編 2009『新修中山町誌』
 - 名和町誌編纂委員会編 1978『名和町誌』
 - 鳥取県埋蔵文化財センター 1986『鳥取県の古墳』
 - 鳥取県埋蔵文化財センター 1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』
 - 鳥取県埋蔵文化財センター 1989『歴史時代の鳥取県』
 - 内藤正中・真田廣幸・日置条左エ門著 1997『県史31 鳥取県の歴史』(株)山川出版社
 - 鳥取県教育委員会 2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第2集(伯耆編)
- 発掘調査報告書類については割愛させていただいた。

第3章 1区の調査成果

第1節 遺跡の立地と基本層序

1 遺跡の立地（第2図）

殿河内上ノ段大ブケ遺跡は、大山北麓から派生する丘陵に挟まれた下市川の左岸の河岸段丘上であり、北から南方向に向かってなだらかに傾斜する平坦地に位置する。遺跡周辺の標高は約35mで、現在の下市川河床からは約10m高くなる。調査の工程上、便宜的に平成23年度調査区を1区、平成24年度調査区を2区として区分することとした。

2 1区の基本層序（第6図、文中写真2～5）

遺跡の周囲は、水田及び畑地になっているが、昭和56～61年にかけて大規模な圃場整備が行われており、本来の地形は大きく損なわれている。1区西側（概ね8ライン以西）では、段丘基盤層となる河川氾濫由来の礫層（Ⅸ層）まで掘削を受けていた。また、同区東側においても、礫層まで大きく掘削された部分が2箇所あるなど、遺構の遺存状態は非常に悪く、Ⅳ～Ⅵ層まで平坦に掘削された後、30～70cm程度の造成土によって盛土されていたことが判明した。加えて、水田耕作の影響と思われる土質の変質が著しく、遺構検出面が鉄分の沈着により赤褐色に変色し、遺構検出がかなり困難であった。1区で検出した遺構は、調査区の東半分に限られることが判明した。

1区の層序は、遺構が検出された東半では、上から1-I層（黒褐色土：耕作土）、1-II層（にぶい黄褐から褐灰色土：造成土）、1-III層（暗褐色～黒褐色土：旧耕作土）、1-IV層（褐色から暗褐色土：縄文時代から中世の遺物包含層）、1-V層（黒褐色土：縄文時代の遺物包含層）、1-VI層（にぶい黄褐色土：ソフトローム層相当か）、1-VII層（黒褐色シルト）、1-VIII層（暗褐色シルト）に分層できた。1-VI・1-VIII層以下は河川氾濫由来の礫層（1-Ⅸ層）となっている。

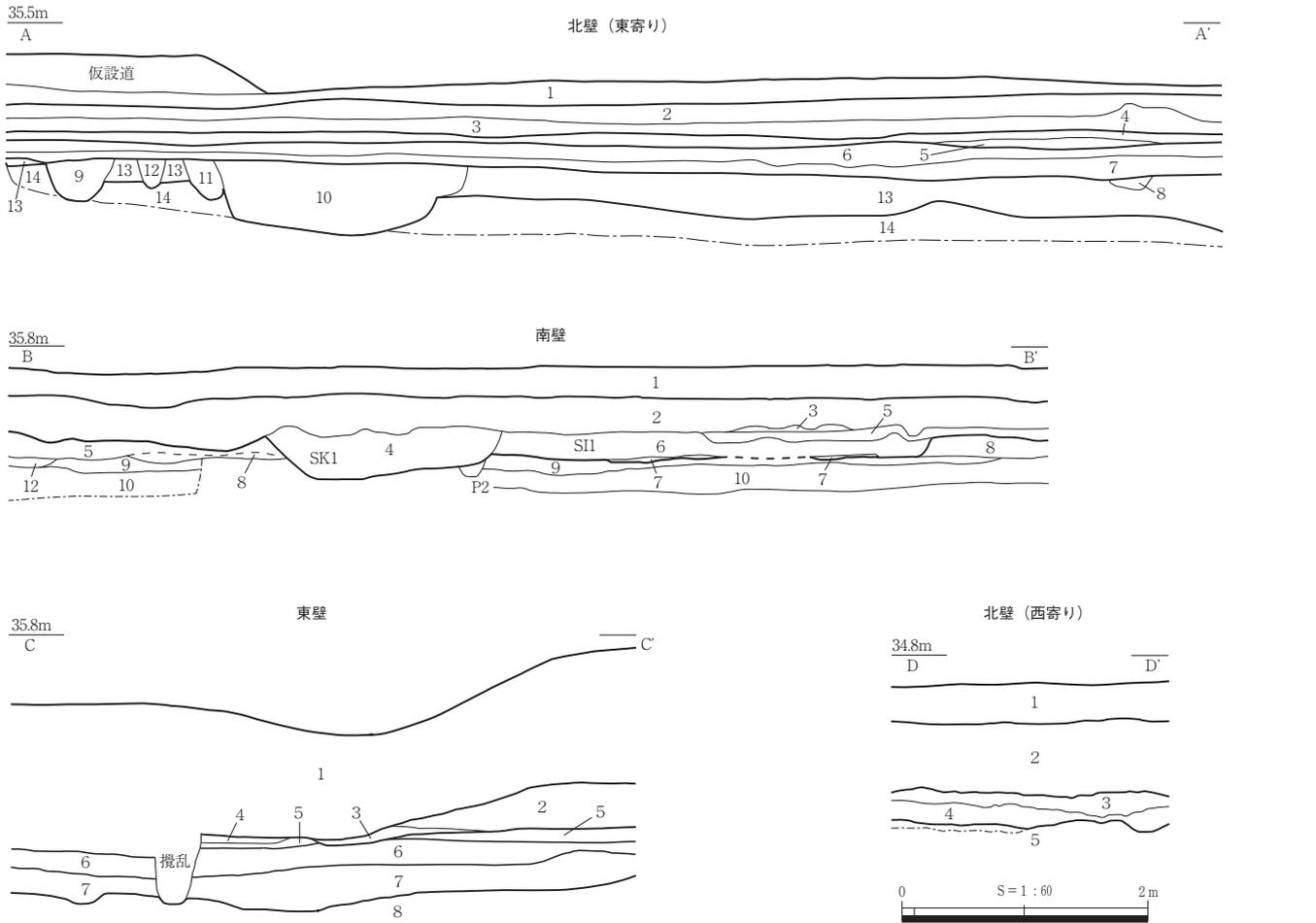
1区西側は、遺物包含層は検出されず、表土、造成土（1・2層）以下は無遺物の河川堆積層と考えられ、1区東側の1-VII層以下に相当すると思われる粗砂、礫を多量に含む層（3～5層）となる。なお、3層中で圃場整備前の用水路と思われる溝を検出した。

遺構検出層位は、1-IV・1-V・1-VI層であるが、このうち1-VI層上層は前述のとおり変色している。1-VI層以下には、遺物は含まれない。概ね5ライン付近から東側では、1-VI層上に遺物包含層が遺存しており、縄文土器から中世遺物を包含する1-IV層、縄文土器（早期から晩期）を多量に包含する1-V層が堆積していた。これらの層は、縄文時代後期から中世にかけて形成された層と考えられ、元来浅い谷地形となっていた部分に堆積したものと判断される。



文中写真1 1区北西側完掘状況（南から）

第3章 1区の調査成果



北壁（東寄り）土層断面

- 1-I 1 表土
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性なし、しまり強。(旧表土)
- 1-II 3 黄褐色土 (10YR5/6) と褐色土 (10YR4/1) が混ざる。
1mm以下の粗砂を多く含む。粘性なく固くしまる。(造成土)
- 1-III 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性やや強く、固くしまる。粗砂をやや多く含む。シルト質。
- 5 におい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性やや強く、固くしまる。シルト質。
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、軟。砂粒を少量含む。粘質。
- 7 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、軟。部分的に鉄分が沈着する。やや砂質。
- 8 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強く、軟。均質。ピット埋土か。
- 1-IV 9 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、軟。炭化物を少量含む。やや砂質。
- 10 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、軟。5~30cm大の礫を非常に多く含む。遺物なし。
- 11 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性強く、軟。均質。
- 12 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強く、軟。均質。
- 1-V 13 黒褐色土 (10YR2/3) 径1cm以下の小礫を少量含む。粘性なく、軟。遺物を非常に多く含む。
- 1-VI 14 におい黄褐色土 (10YR5/4) 径1cmの砂礫と炭化物を少量含む。粘性強く、軟。

東壁土層断面

- 1-I-II 1 表土・造成土
- 1-III 2 褐色土 (10YR4/4) 粘性強く、固くしまる。シルト質。(旧耕作土)
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし、しまり弱い。シルト質。(旧耕作土)
- 1-IV 4 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱く、固くしまる。1mm程度の砂粒を少量含む。シルト質。
- 5 褐色土 (10YR4/3) 粘性強く、固くしまる。シルト質。
- 6 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強く、しまり弱い。(SD1埋土)
- 7 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強く、しまり弱い。(SD1埋土)
- 1-VI 8 におい黄褐色土 (10YR5/4) (地山)

南壁土層断面

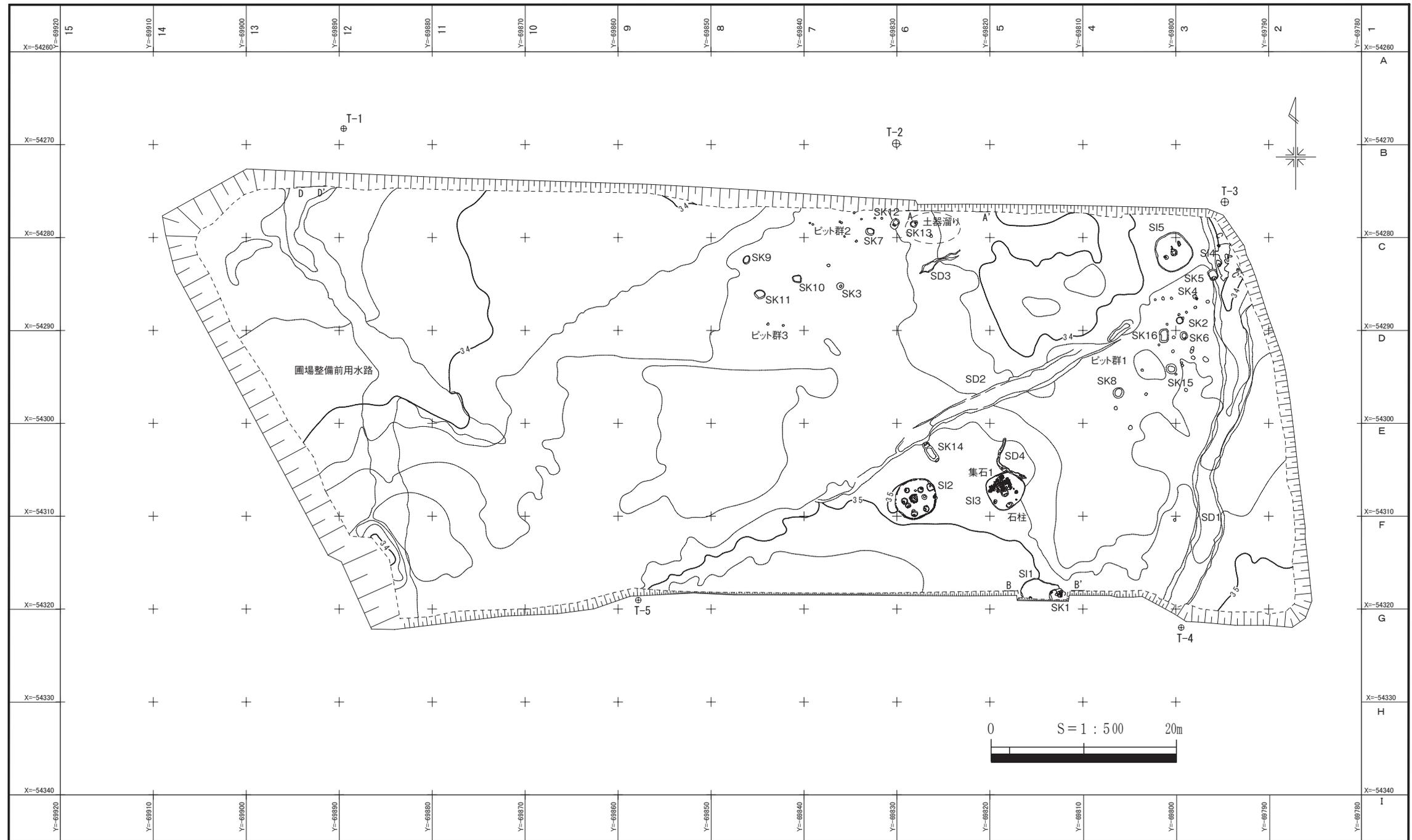
- 1-I 1 黒褐色土 (10YR3/2) (耕作土)
- 1-II 2 におい黄褐色土~褐色土 (10YR5/4~10YR4/1) (造成土)
- 1-III 3 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強い。
- 4 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強い。下層に土器を含む。(SK1埋土)
- 1-IV 5 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強い。
- 6 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性やや強い。(SI1埋土)
- 7 黒褐色土 (10YR3/2) よく締まる。硬化面。砂礫をわずかに含む。(SI1貼床)
- 1-VI 8 におい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性やや強い。ソフトローム相当。
- 1-VII 9 黒褐色土 (10YR3/2) シルト質。
- 1-VIII 10 黒褐色土 (10YR3/1) シルト質。
- 1-VI 12 におい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性強い。ソフトローム相当。

(地山)

北壁（西寄り）

- 1-I 1 表土・造成土
- 1-II 2 耕作土・造成土
- 3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性弱く、しまり強い。φ1~10mmの粗砂・礫粒を多く含む。φ1~5cmの礫を含む。鉄分を少し含む。粗砂・礫主体。(河川堆積)
- 4 におい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性弱く、しまり強い。φ2mm以下の粗砂・細砂主体。鉄分を多く含むところあり。(河床堆積)
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱く、しまり強い。φ1mm以下の粗砂・1-細砂・シルト主体。φ1~5mm程度の粗砂・礫粒を含む。

第6図 1区基本層序



第7図 1区調査後地形測量図



文中写真2 1区南側土層断面（北から）



文中写真3 1区東側土層断面（北西から）



文中写真4 1区北東側土層断面（南西から）



文中写真5 1区北西側土層断面（南から）

1区の本来の地形を推定すると、調査区西側8ライン付近がやや高くなり、東側に向かって徐々に傾斜し、4～5ライン付近で浅い谷部が形成され、2～3ライン付近で微高地が形成され、それより東は下市川の浸食崖となるものと推察される。

第2節 1区の概要（第6・7図）

1区では検出作業の結果、縄文時代後期から中世にかけての遺構、縄文土器を中心に大量の遺物を検出した。

縄文時代では、竪穴建物5基（SI 1～5）、土坑11基（SK 1・4～7・9～13・16）、溝2基（SD 3・4）、集石・石柱1基、土器溜り1箇所を検出した。その他、遺物包含層（1～V層）で縄文時代早期から晩期にかけての大量の遺物を検出した。検出した遺構は、概ね後期初頭から前葉のもの（SI 1～5、SK 1・5～7・9～13・16、集石・石柱、土器溜り）と晩期のもの（SK 4）で、縄文期では断続的に集落が形成されていたことを窺わせる。

弥生時代では、土坑1基（SK14）、自然河川1基（SD 1）を検出した。SK14・SD 1とも後期後葉ごろのものと考えられる。

古墳時代では、前期初頭ごろのものと考えられる溝1基（SD 2）のみを検出した。

中世では、12世紀から13世紀ごろと考えられる土坑3基（SK 2）、詳細な時期は不明であるが中

第3章 1区の調査成果

世と考えられる土坑2基 (SK 8・15)、ピット群1箇所を検出した。

これらの遺構は、1区調査区の東半分でのみ検出できたが、本来は、西側にも広がっていたものと考えられるが、圃場整備による掘削によって消滅したのと考えられる。

第3節 縄文時代の調査成果

1 概要 (第8図)

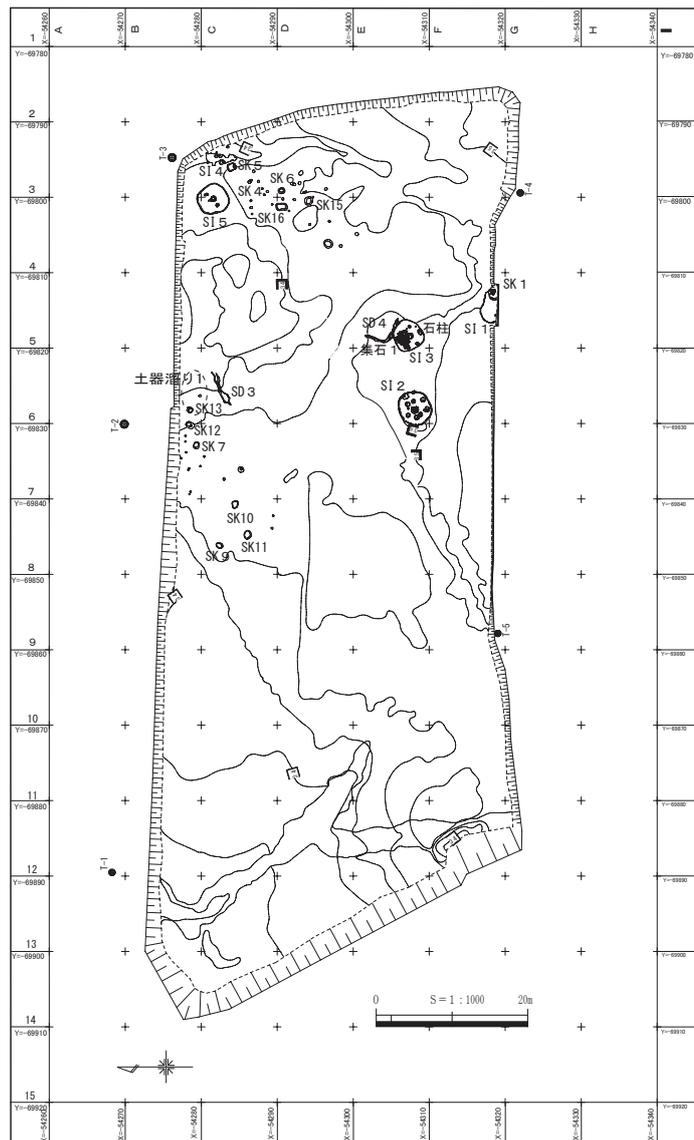
当遺跡では、縄文時代後期から晩期が最も繁栄する時期で、1区では、竪穴建物跡5基 (SI 1～5)、土坑11基 (SK 1・4～7・9～13・16)、溝2基 (SD 3・4)、集石1基 (集石1)、石柱1基、土器溜り1箇所 (土器溜り1) を検出した。

集落が形成される時期は、概ね縄文時代早期から前期初頭、中断を挟んで後期初頭 (五明田式から布勢式併行) から縄文時代晩期 (突帯文系土器様式期) に相当し、断続的に営まれていることが判明した。このうち、縄文時代早期から前期初頭、中期末葉、後期後葉では、遺物出土のみで遺構は確認されていないが、ある程度の出土量があることから、調査地近辺に遺構が存在する可能性がある。

このうち、竪穴建物跡はすべて竪穴住居跡と考えられ、縄文時代後期初頭 (五明田式併行) から造営される (SI 2～5) が、確実な同時性は不明である。やや時期を置いて布勢式併行期の SI 1 が造営されていることが判明した。同時期には土器溜り1も形成されており、調査地の北側にも集落域が広がっているものと考えられる。

縄文時代後期前葉ごろ (崎ヶ鼻1式併行) には、石柱や集石遺構、土坑が造られる。住居は確認されていないが、調査区周辺には存在するものと推測される。

土坑については、詳細な時期及び性格は明確ではないが、居住空間からやや離れた位置にあることから、土壌墓であった可能性がある。谷を挟んで東側 (SK 4・5・6・16) と西側 (SK 7・9～13) の大きく2箇所に分かれるが、さらに細かなグルーピングが可能である。時期が判明するものとしては、SK 1 が後期前葉、土器埋設土坑 SK 4 が晩期後葉 (突帯文土器様式期) ごろと考えられる。その他のものについては、詳細な時期は不明であるが、SK12・13が、布勢式併行期の土器溜り1の検出層位以下で検出されたことから、布勢式併行期以前と考えられる。



第8図 1区縄文時代遺構配置図

また、遺物包含層から出土したものとしては、土器は深鉢が主体で、精製土器・粗製土器が含まれる。敲石、石皿、打製石鋏、磨製石斧、漁労用と考えられる石錘などの日用品のほか、祭祀用と考えられる細身の両刃磨製石斧など生活全般に使用した遺物が多種多量に出土している。

当遺跡は、竪穴住居、墓、祭祀関連遺構及び生活必需品がまとまって出土しており、当時の集落様式を考える上で良好な遺跡であると考えられる。

この時期の集落は、下市川沿いの調査範囲の南北周辺に広がっているものと考えられる。

2 竪穴建物跡

SI 1 (第9・10図、表1、PL.7・33)

1区南東調査区際のF4グリッドにあり、標高35.0m付近の平坦面に立地する竪穴住居跡である。調査区際に設定した土層観察用のサブトレンチ掘削中に、硬化面を検出したことで確認できた。造成土除去後の1-VI層上面で検出し、全体の半分以上は南側調査区外へ延びている。北西側約8mにはSI3がある。東側は縄文時代後期前葉のSK1によって掘り込まれている。

平面は不整楕円形を呈すものと考えられ、長軸3.9m、短軸2.4m以上を測り、平面積6.8m²以上を測る。壁高は、最も遺存状態のよい西壁で、最大0.1mを測る。壁溝は、検出されなかった。

主柱穴は2基検出できたが、平面の残存部から推定すると本来は4基程度であった可能性がある。主柱穴は規模が小さく、貧弱な印象を受ける。主柱穴間距離は、2.3mである。

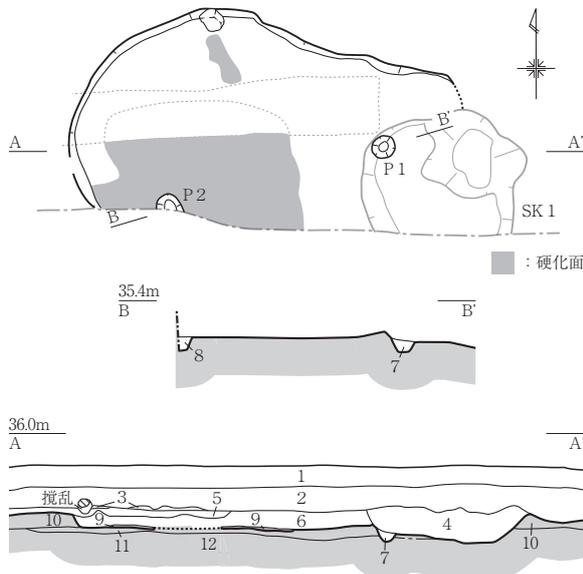
床面の南側は、7層による貼床が施され硬化している。硬化面は平坦ではなく、凹凸が認められる。

埋土は、上半部が削平されているためほとんど遺存していなかったが、やや粘性がある灰黄褐色土が単層で入ることを確認した。主柱穴の埋土は、黒褐色土又は暗褐色土単層である。柱痕は確認できなかった。

遺物は、埋土下層中から縄文土器等が出土した。図化したものには、縄文土器1~4がある。遺構に伴うものは精製深鉢1と粗製深鉢4で、特に1は布勢式併行期(中津・福田KⅡ式土器

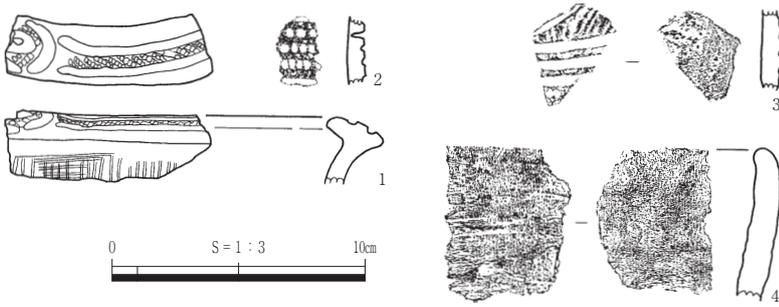
表1 SI1ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	24×21-16	主柱穴
P2	26△×24-19	主柱穴



- 1 黒褐色土(10YR3/2)耕作土
- 2 にぶい黄褐色土~褐灰色土(10YR5/4~10YR4/1)造成土
- 3 黒褐色土(10YR2/2)粘質
- 4 黒褐色土(10YR2/3)下層に土器を含む。SK1埋土
- 5 黒褐色土(10YR3/1)やや粘質
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2)やや粘質
- 7 黒褐色土(10YR2/3)P1埋土
- 8 暗褐色土(10YR3/3)炭化物をわずかに含む。
- 9 黒褐色土(10YR3/2)よく締まる。硬化面。砂礫をわずかに含む。
- 10 にぶい黄褐色土(10YR5/3)やや粘質。ソフトローム相当
- 11 黒褐色土(10YR3/1)シルト質。地山
- 12 黒褐色土(10YR3/2)シルト質。地山

第9図 SI1



第10図 SI 1 出土遺物

様式第4様式)と考えられる。2は縄文時代前期、3は縄文時代後期初頭のものと考えられ、混入したものとする。

出土遺物から、布勢式併行期(中津・福田KⅡ式土器様式第4様式)、縄文時代後期前葉ごろのものと考えられる。

なお、埋土下層中出土の炭化物2点について放射性炭素年代測定を行ったところ、試料名1767-1(測定番号IAAA-112334)は補正測定値 $3,200 \pm 20$ yrBP、1767-2(測定番号IAAA-112335)は補正測定値 $3,820 \pm 30$ yrBPという値であった。1767-1は概ね縄文時代晩期初頭、1767-2は概ね縄文時代後期前葉ごろの値と考えられる。土器型式からみると、後者の年代値がより近い値を示しているものと考えられ、前者は混入したものを測定したものとする。

SI2(第11～14図、表2、PL. 8～12・32・33)

1区東南側のE5グリッドからF5グリッドにあり、標高35.0mのほぼ平坦面に立地する竪穴住居跡である。東側約10mにはSI3、南東側約13mにはSI1がある。造成土除去後のI-VI層上面で検出したが、上部は圃場整備などにより削平されている。

この住居は柱穴の切り合い関係及び貼床下で検出した柱穴の存在などから、SI2-1→SI2-2→SI2-3の順で2回の建て替えが行われていると判断した。建て替えにおいて床面の拡張があったか否かは不明である。以下、新しいものから記述することとする。

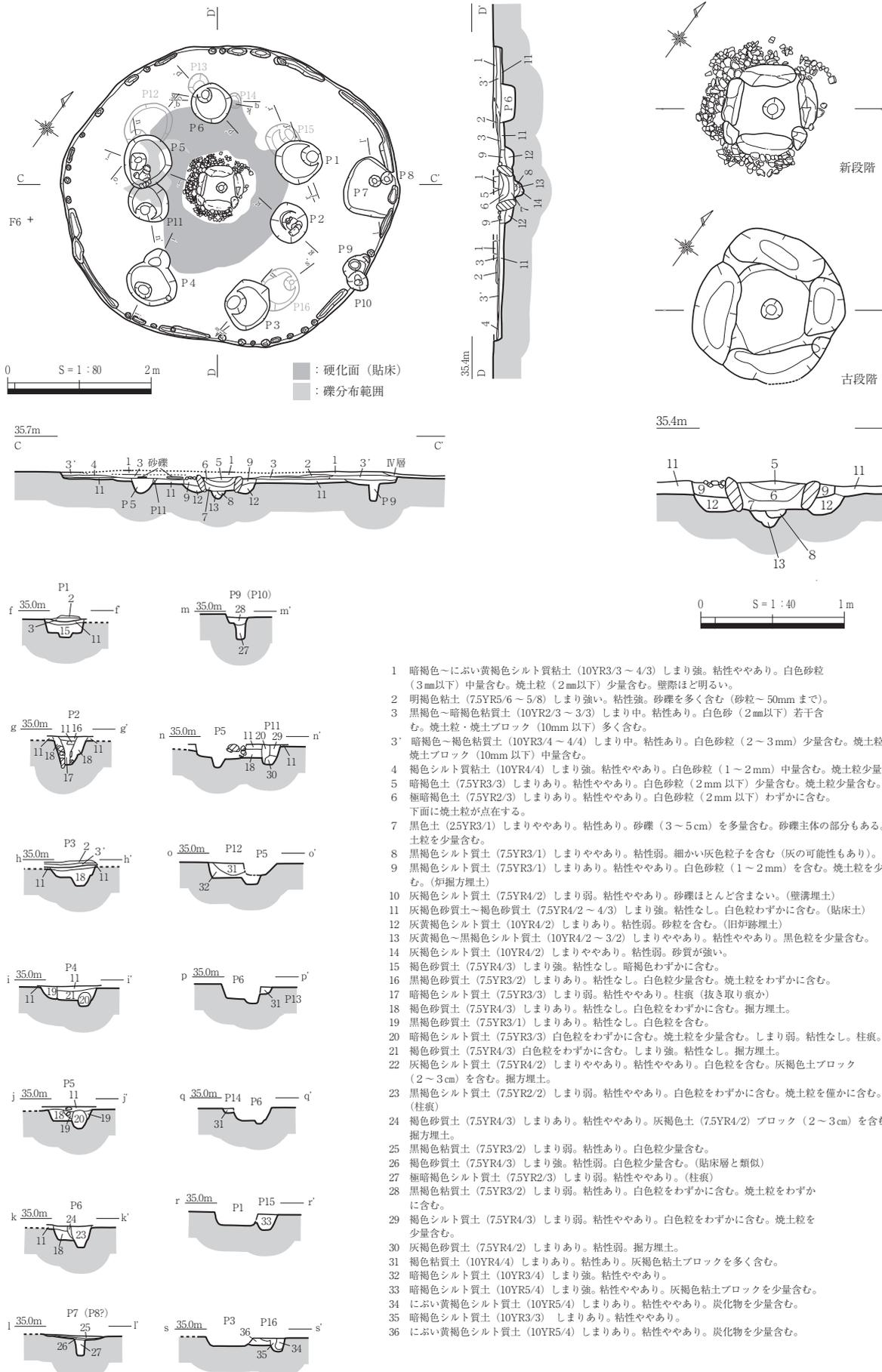
SI2-3は、平面形は不整隅丸五角形を呈し、長軸4.7m、短軸4.1mを測る。床面積は 14.2m^2 である。壁高は貼床面から最大0.1m程度で、その立ち上がりは垂直に近い。壁下には、幅10cm程度の壁溝または直径10cm程度の杭穴状の落ち込みが巡っている。

床面は、石囲炉の周りなどを除きほぼ全面にわたって貼床され、硬化している。その中でも、柱穴を結ぶラインより内側の貼床は厚く、硬化も顕著である。

主柱穴は、P1・3・4・5・6の5基と考える。主柱穴は、平面形が円形ないしは楕円形で、P3以外は底面の外側壁ぎわに柱部のピットがある。P5には裏込めに数個の礫が使われている。規模は、長径53～74cm、短径52～66cm、底面までの深さは17～26cmである。底面の柱痕部分は、長径21～32cm・短径20～30cm、深さは6～14cmである。したがって、貼床面からの柱痕部分全体の深さは26～40cmとなる。柱穴間距離は、P1-P3間から順に2.4m、1.4m、1.8m、1.8m前後とばらつきがある。なお、廃棄時にいずれの柱も抜き取られていると考えられ、柱の太さは不明である。また、貼床面上で検出した縞状の砂礫は、P5の柱痕部分を覆っていないのに対し、P11の柱痕部分はその一部が覆われていたことから、SI2-2の段階ではP11の柱はなかったと判断できる。

P1-3間にあるP2は、主柱穴と同規模で柱痕跡も確認でき、SI2-3に伴う構造柱とも考えられるが、P1に近すぎるため、補助柱と考える。

また、北東壁際には、左右に各2基(P7・8とP9・10)の柱穴がそれぞれ接しており、出入口部を作るためのものと推測される。左右いずれのピットも切り合っていないが、P7の上面を貼床層



第11図 SI2

第3章 1区の調査成果

と類似した土が覆っているが、P 9では貼床層に類似した土は見られないことから、SI 2-3に伴う柱穴は、P 8とP 9と推測する。柱穴間距離は1.3 m程度である。いずれも柱痕跡は確認できなかった。なお、P 7・P 8を内包する北東壁際には、辺80cm×75cm、深さ5～6 cmの不整形の浅い掘り込みがある。用途は不明である。

床面の中央やや南西寄りには、6個の安山岩を使った方形の石囲炉が構築されている。炉の寸法は、内法で長軸0.5 m、短軸0.45 mである。底面は長軸0.4 m、短軸0.35 mを測る。使用石材は、南北の大型の石材が黒雲母角閃石安山岩で、残りの4石は結晶質安山岩である。いずれも下市川流域で産出する石材であることから、近辺から調達したものと考えられる。南西側の石材には被熱した痕跡がみられ、脆くなっている。炉石頂部からの深さは、東側以外の3辺が24～25cmであるのに対し、北東側は21cmと低く、また据えられている炉石も、東側のみ頂部が平坦であることから、出入口側となる東側が焚き口と推測される。炉底面は被熱硬化しているが、焼土は南西側の炉石下に少量みられるのみであった。底面中央には直径13～14cm・深さ7cm程度の小ピットがあり、煮炊きで深鉢形土器を立てるためのピットか、炉内に土器を埋設したピットの可能性が考えられる。炉の掘方は、貼床されていない1.0 m×1.0 mのほぼ方形の範囲とした。北東側以外の掘方埋土（裏込め土）の上面には直径3～7cmの礫が敷かれている。

埋土は、10cm程度しか遺存していないが、大きく上層と下層の2層に分けられる。上層は2mm以下の焼土粒を少量含む暗褐色から黄褐色土、床面直上の下層は10mm以下の焼土粒・ブロックを多く含む黒褐色から暗褐色土である。上層と下層の間には、50mm以下の礫を多く含む粘質土（焼土）塊が住居南東側を中心に挟まれるようにある。この被熱硬化した粘土（焼土）は、住居南東側で面的に広がっており、SI 2-3の廃棄後、下層が堆積した段階で生じた窪地で焚き火等を行ったことが推測される。この面的に広がっている粘土（焼土）の由来については、屋根に塗られていた粘土の可

能性がある。また、貼床面上には、南西側から流入したと考えられる砂礫が、中央部（炉の方向）へ向かって縞状に広がっている。なお、炉内埋土下層も、多量の砂礫が混じる粘性の強い黒色土となっており、南西側の床面上から流れ込んだような堆積状況を示している。

SI 2-2は、SI 2-1を建て替えた後の住居である。SI 2-3とは柱穴の配置が一部異なっている。

主柱穴はP 2・11の2基となる可能性もあるが、後述するSI 2-1が4本柱、前述したSI 2-3が5本柱であることから、途中主柱穴が減じられることは考えにくい。P 1・3・4・11・6の5基と考える。P 11はP 5に切られていることから、SI 2-3より先行するものと考えた。柱穴間距離は、P 2-P 3間から順に、1.4 m、1.3 m、1.1 m、1.9 m、2.0 m前後とばらつきがある。主柱穴は、P 11が円形で直

表2 SI2ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P 1	65×62-26	SI 2-3・2主柱穴
P 2	57×52-40	補助柱穴か 柱痕跡幅17cm
P 3	62×60-31	SI 2-3・2・1主柱穴
P 4	73×62-29	SI 2-3・2主柱穴 柱痕跡幅16cm
P 5	74×66-31	SI 2-3主柱穴 柱痕跡幅11cm
P 6	57×56-30	SI 2-3・2主柱穴 柱痕跡幅21cm
P 7	80×75-27	SI 2-3入口
P 8	80×75-25	SI 2-2入口
P 9	35×30-31	SI 2-2入口
P 10	30×27-34	SI 2-3入口
P 11	57×55-28	SI 2-2主柱穴 柱痕跡幅11cm
P 12	73×58-30	SI 2-1主柱穴
P 13	29×21△-11	
P 14	20×15△-6	
P 15	45×35△-22	SI 2-1主柱穴
P 16	(58)×52-20	SI 2-1主柱穴

径56cm前後、柱痕部分全体の深さが28cmであるのに対し、SI 2-2のP 5は不整楕円形で長径74cm、短径66cm、柱痕部分全体の深さが31cmと形状、規模が異なる以外は同じである。この場合も、P 2は補助柱穴と考えられる。また、出入口部の柱穴は埋土の状況から、P 7とP 10の2基と推測する。柱穴間距離は1.35mである。

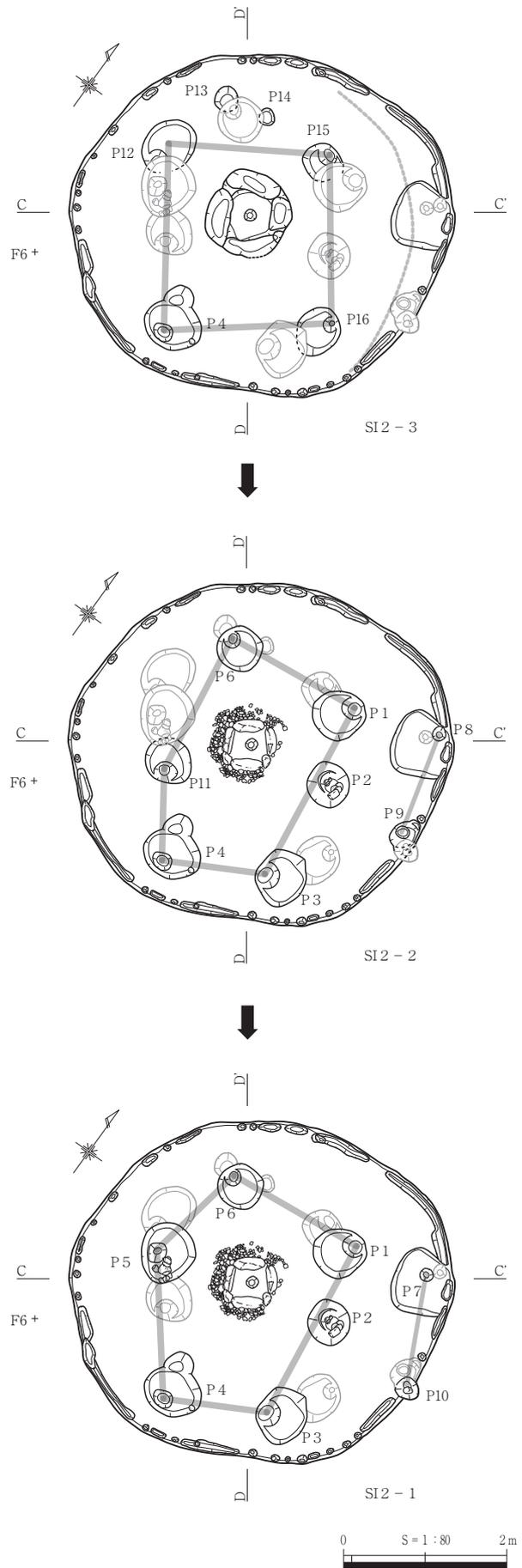
SI 2-1は、SI 2-3の貼床下で炉の掘方や柱穴を検出したことで確認できたものである。本来の規模等は不明である。

柱穴はP 15・16・4・12の4基と考える。このうちP 4は建て替え後も使用されている。平面形はいずれも楕円形で、底面の外側壁ぎわに柱部のピットがある。規模は、長径58～73cm、短径45～65cm、底面までの深さが10～21cmである。底面の柱痕部分は、長径20～27cm、短径18～27cm、深さは9～10cmである。したがって、貼床下からの柱痕部分全体の深さは20～30cmである。柱の配置はほぼ方形で、柱間寸法はいずれも2.05～2.1mで揃っている。

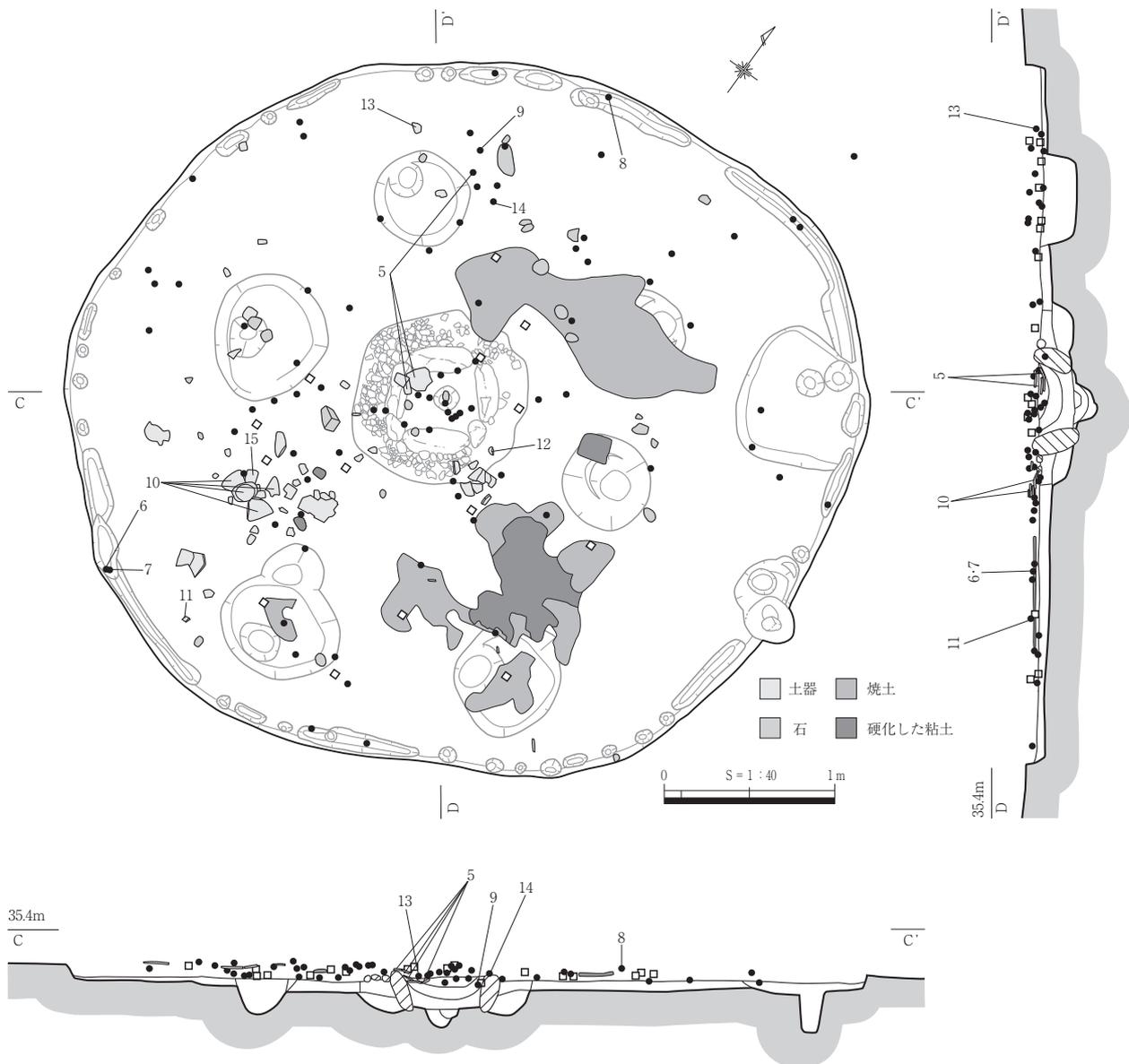
炉は、SI 2-3の石囲炉の掘方内の裏込め土の下から炉石抜き取り痕が検出されたことで確認できた。抜き取り痕の形状、配置からすると、方形の石囲炉であったことが推測できる。抜き取り痕の寸法は、南東-北西の外辺が0.95m、内辺が0.55m、南西-北東の外辺が0.9m、内辺が0.5mである。南東側の抜き取り痕はほかの3面より3cmほど浅い。底面は硬化し、ほぼ中央に直径23cm、深さ15cm程のピットがあり、土器を埋設した可能性が考えられる。掘方は1.1m×1.1mのほぼ方形である。SI 2-1の石囲炉の掘方は、SI 2-2・3のそれより一回り大きいことが判明した。また、掘方埋土の上面は、SI 2-3の貼床層に覆われている。

なお、炉と柱穴の配置から、出入口は南東側であったと推測される。

出土遺物には、土器類（深鉢・浅鉢）、石器類（石鏃・磨石類・剥片）などがあり、いずれもSI 2-3に伴うものと考えられる。量的にはさほど



第12図 SI 2変遷図



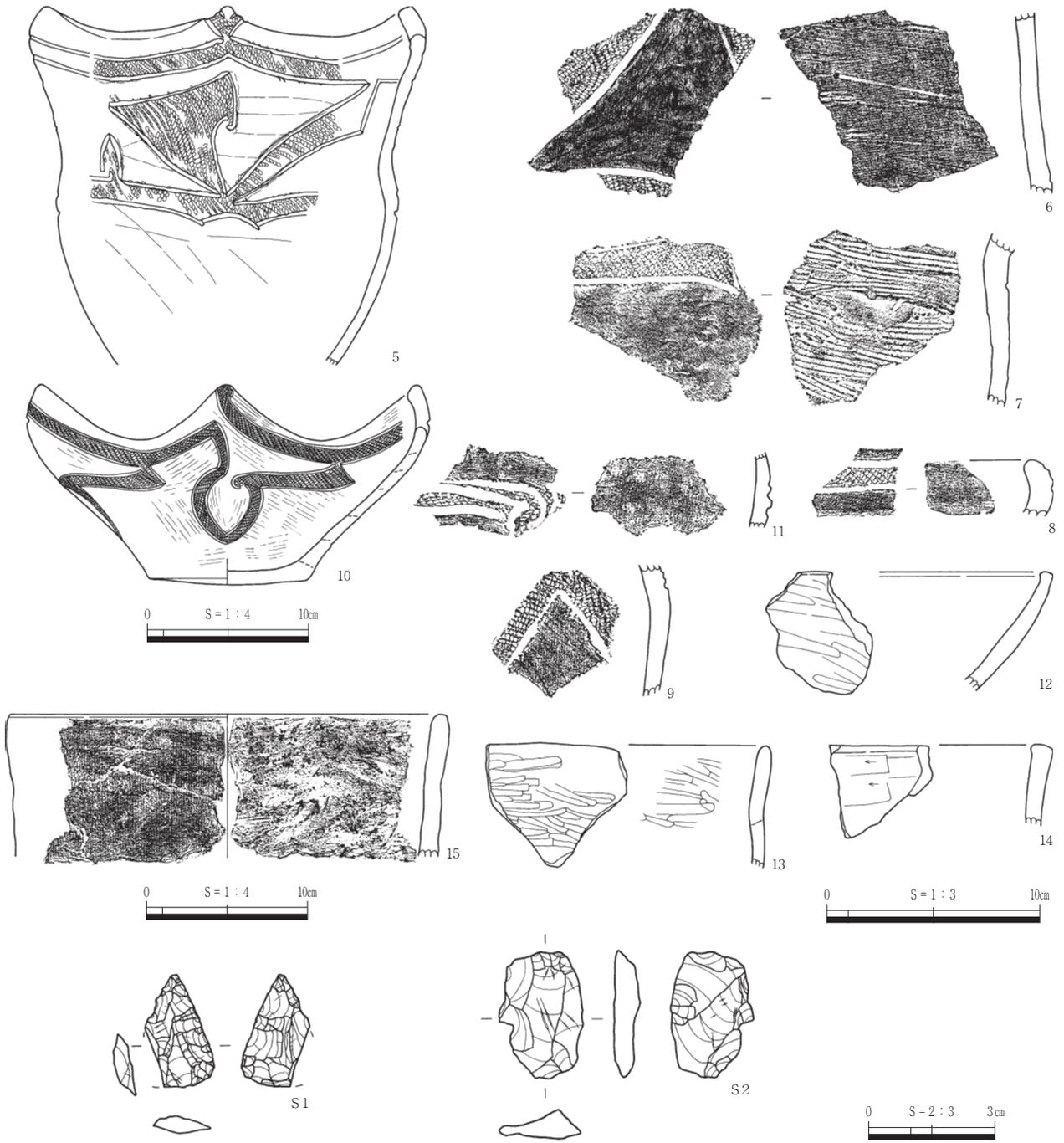
第13図 SI2 遺物出土状況

多くない。特に、石器類は量的に少ないだけでなく、石鏃と磨石類の2器種で、土掘り具である打製石鍬がないなど、器種構成も乏しい。

遺物は、SI 2-3に伴うものと考えられ、埋土及び炉内埋土・壁溝内などから出土している。そのうち、1層と3ないし3'層から出土したものが大部分を占める。

図化したものには、1層出土遺物には、精製浅鉢10、粗製深鉢15がある。これらは、住居跡の埋没過程でその凹地に捨てられたものと推測する。ほとんどが石囲炉の南西側から出土したものである。3及び3'層出土遺物には、精製深鉢5・6・9・12・13、精製浅鉢11、粗製深鉢14がある。これらは、面的に広がる被熱硬化した粘土（焼土）や砂礫を多く含む粘質土（焼土）塊が分布する中間層（2層）の下から出土したもので、住居の廃棄段階に捨てられたものとする。遺物は、石囲炉の周辺をはじめ濃淡に差はあるものの、ほぼ全面から出土している。そのうち南東側炉石のすぐ外と西側の炉石上面付近に、それぞれほぼ半個体分の精製深鉢5が出土している。

また、壁溝内出土遺物には、精製深鉢6～8がある。これらは、壁溝に手を加えた際に入ったもの



第14図 SI2出土遺物

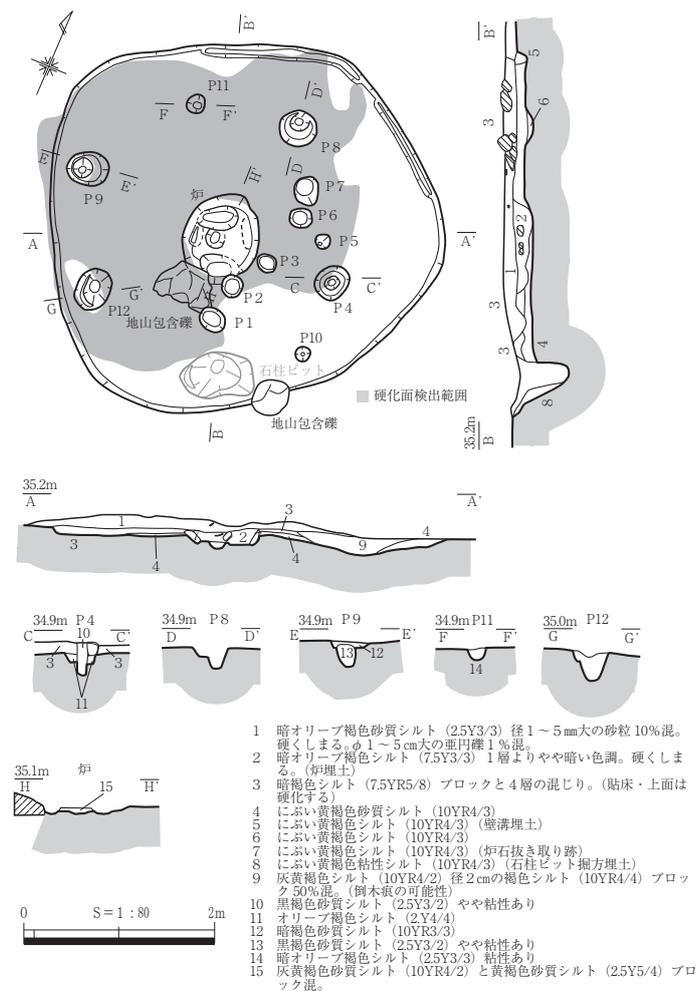
と推測できることから、住居を使用している段階のものと考えられる。

その他、石器がわずかに出土しており、サヌカイト製平基無茎石鏃未成品 S 1、黒曜石製楔形石器 S 2 を図化した。いずれも埋土中からの出土である。

出土遺物から、五明田式併行期（中津・福田 K II 式土器様式第 3 様式古段階）、縄文時代後期初頭ごろのものと考えられる。

SI3（第15～19図、表3、PL. 13～15・34・35・58・59）

1区E4グリッド南西隅にあり、標高34.8m付近の平坦面上に立地する竪穴住居である。西側約



第15図 SI3

の柱も抜き取られていると考えられ、柱の太さは、P4では直径約10cmと推測される。

床面の中央には、楕円形の掘方と炉石の抜き取り痕が残されており、方形の石囲炉が構築されていたと推定される。掘方の寸法は、長径100cm、短径80cmである。炉の底面の寸法は、残存値で長軸

表3 SI3ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	39×24-8	
P2	24×23-12	
P3	21×19-20	
P4	37×33-38	主柱穴
P5	14×11-28	
P6	23×20-34	
P7	28×25-34	
P8	39×38-32	主柱穴
P9	44×36-30	主柱穴
P10	16×15-18	
P11	21×19-22	
P12	45×35-36	主柱穴
石柱ピット	75×50-55	主柱穴を転用

10mにはSI2、南側約8mにはSI1がある。造成土除去後の1-VI層上面で検出したが、上部は圃場整備などにより削平されている。

平面形は不整隅丸五角形で、長軸4.05m、短軸3.85m、床面積は12.0m²である。壁高は貼床面から最大0.11m程度と浅く、その立ち上がりは垂直に近い。壁下には、幅10cm程度の壁溝を北側の二辺で検出した

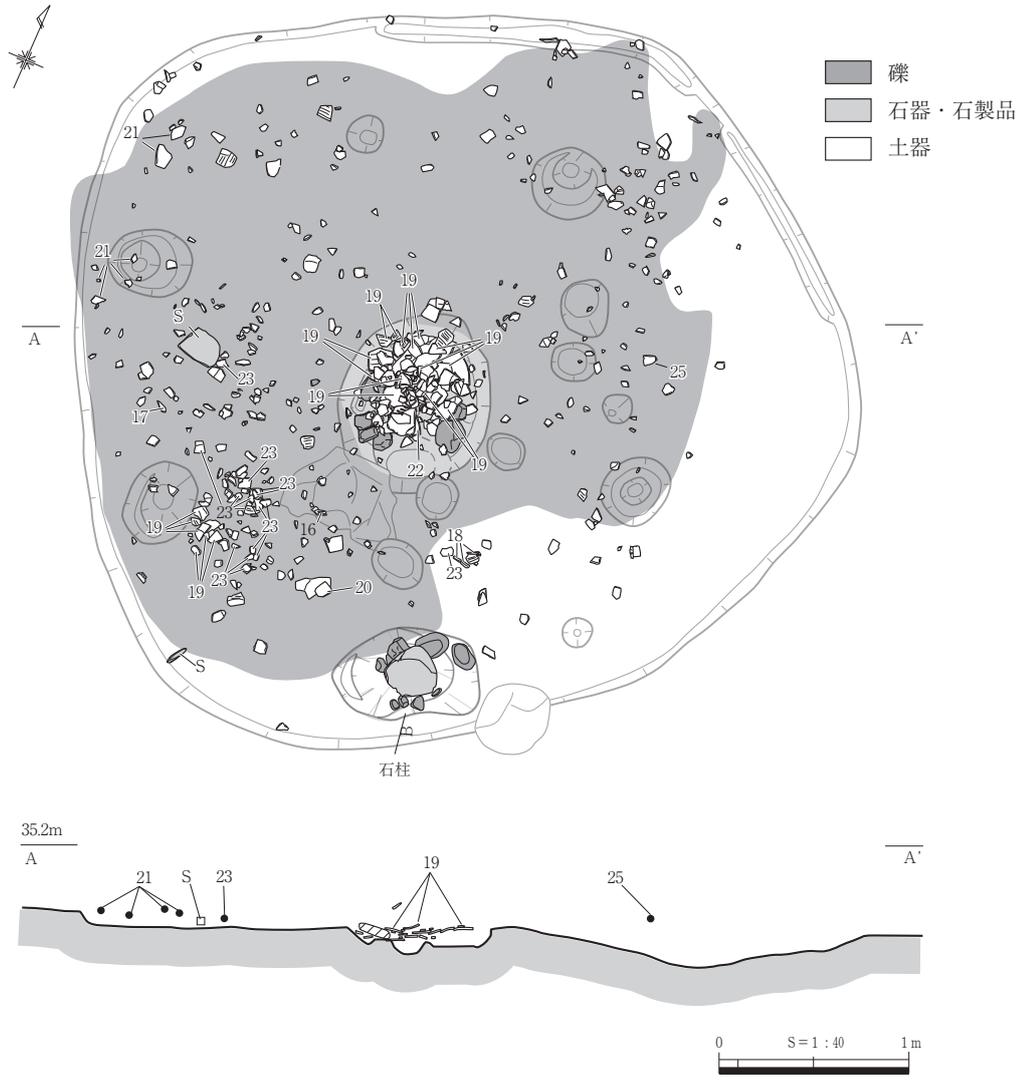
床面は、炉の周りなどを除きほぼ全面にわたって貼床され、上面は硬化していた。貼床の厚さは10cm前後である。

主柱穴は、P4・8・9・12の4基と、住居廃棄後に石柱ピットと重複する1基を併せた5基と考える。主柱穴は、平面形が円形ないしは楕円形である。規模は、長径37~45cm、短径33~38cm、床面(標高37.8m)から底面までの深さは30~38cmである(石柱ピットを除く)。柱穴間距離は、P4-P8間から順に1.75m、2.35m、1.3m、1.55m、1.5mとばらつきがある(石柱ピットを含む)。なお、廃棄時にいずれ

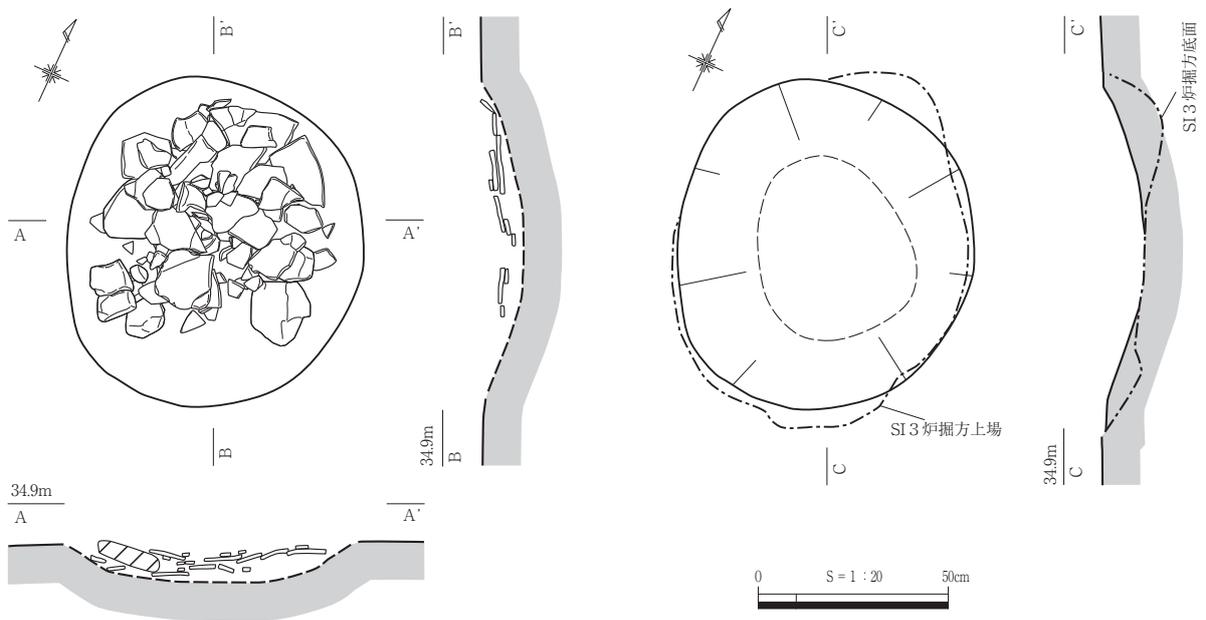
44cm、短軸34cmを測る。炉底面は硬化し、中央で長径25cm、短径20cm、深さ4~5cmの小ピットを検出した。

住居の埋土は床面部分と、炉跡部分の2層に分けられる。床面部分は垂円礫を含む暗オリーブ褐色砂質シルトであり、小型の土器片がまばらに出土した。特筆すべき遺物としては、両端に刃部を持つ小型の磨製石斧S1が出土している。この石斧は石柱ピットの近辺で、住居の床面からは浮いた状態で出土している。

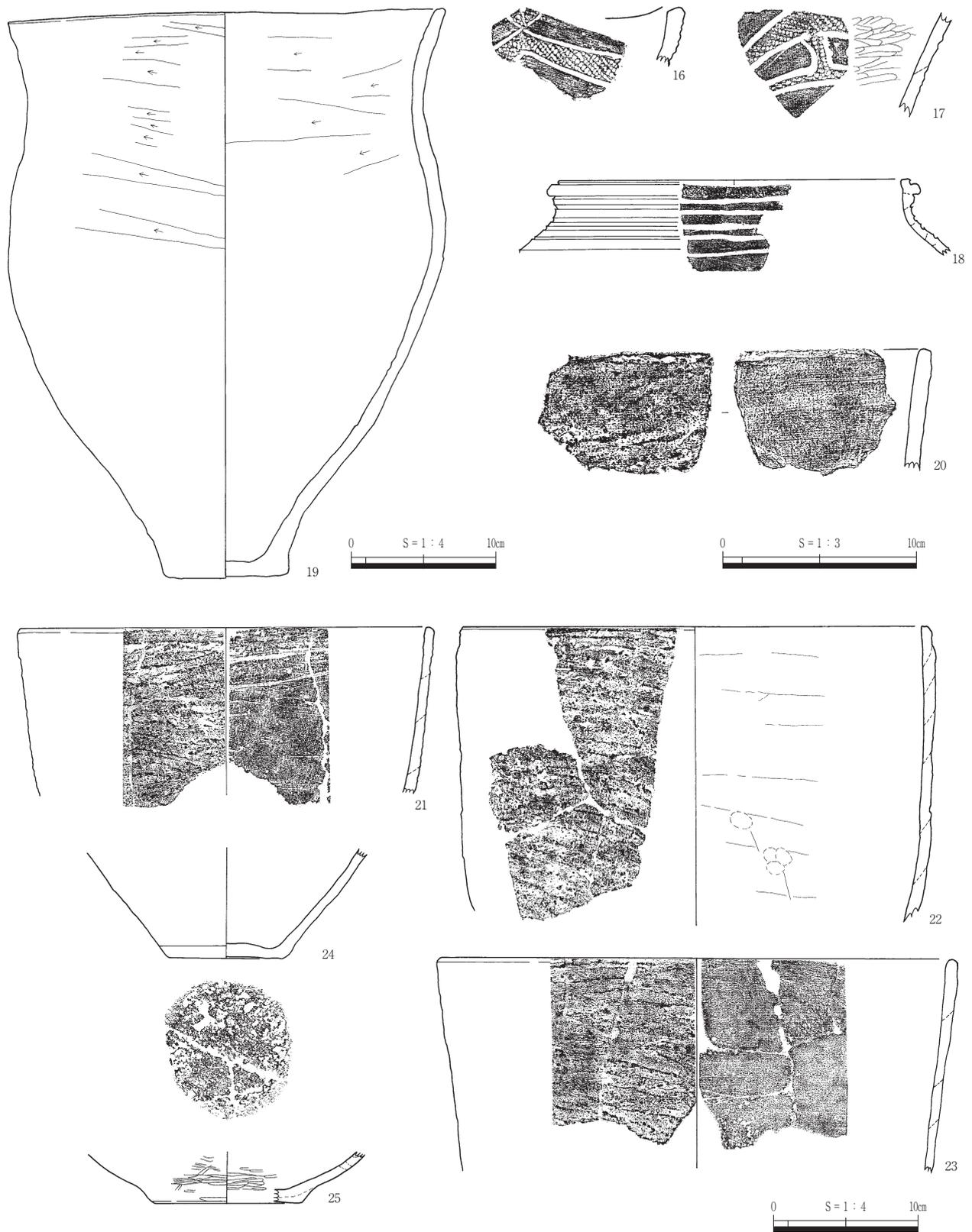
炉跡部分は、床面埋土よりも暗い色調の暗オリーブ褐色シルトである。上面では炉跡が埋没し始め、直径約80cm、深さ約10cmの皿状の窪みになった



第16図 SI3遺物出土状況



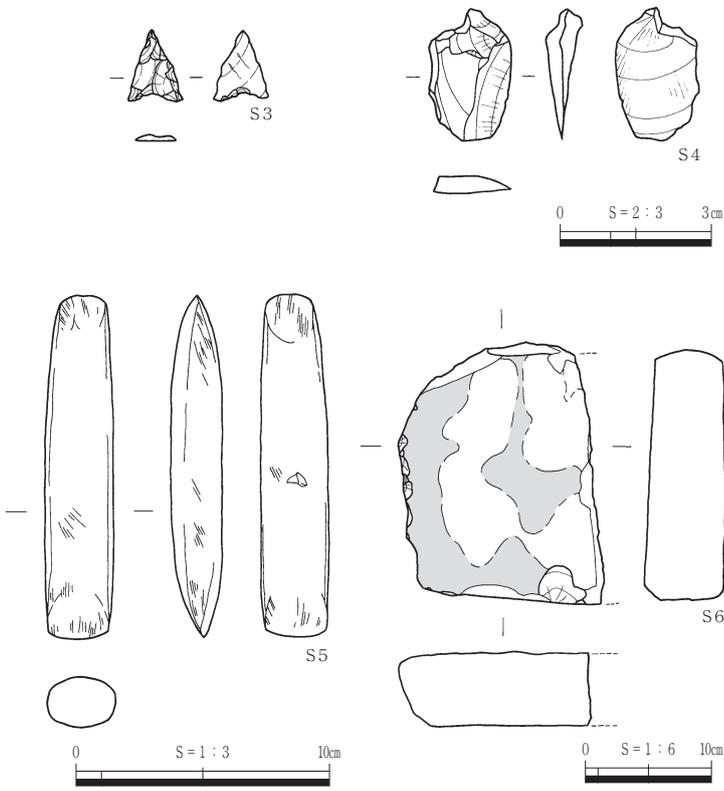
第17図 SI3炉上面土坑



第18図 SI3出土遺物（1）

段階で、10～15cm大の6個の亜角礫と、1個体分の粗製深鉢19の破片が、あたかも花卉のように並べ、重ねられた状態で出土した。

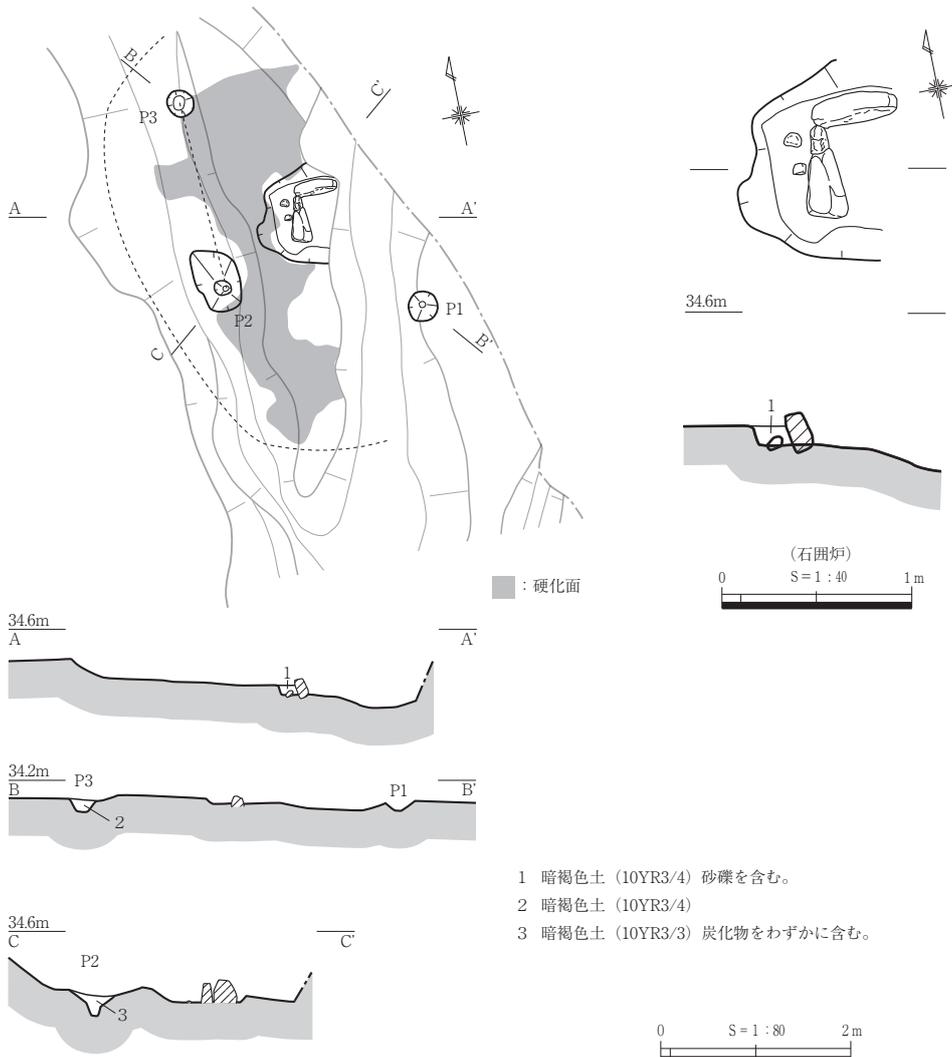
遺物は、埋土下層及び炉跡上面から出土したものを図化した。埋土下層では、磨消縄文を施す有文精製深鉢16・17、無文精製壺18、粗製深鉢20～24、無文精製浅鉢25、サヌカイト製石鏃S3、黒



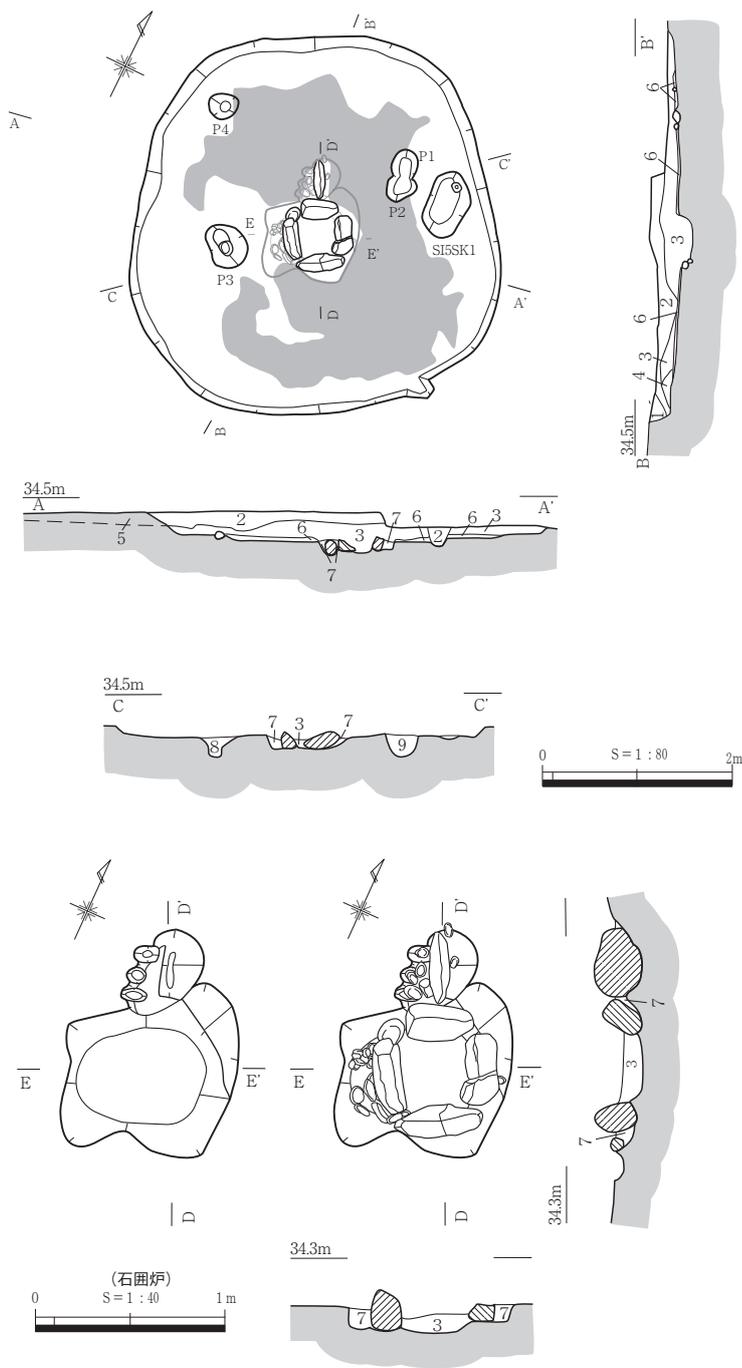
第19図 SI3出土遺物(2)

表4 SI4ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸×深さ) cm	備考
P 1	30×30-22	主柱穴
P 2	72×44-29	主柱穴
P 3	33×26-17	主柱穴



第20図 SI4



- 1 暗褐色土(10YR3/3)均質、しまりなし、粘性なし。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)砂礫わずかに含む。炭化物わずかに含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2)炭化物わずかに含む。礫含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/4)炭化物わずかに含む。
- 5 黒褐色土(10YR2/3)砂礫わずかに含む。縄文土器含む。基盤層V層
- 6 におい黄褐色土(10YR4/3)硬化面。
- 7 暗褐色土(10YR3/3)石囲炉裏込土。
- 8 灰褐色土(10YR4/2)
- 9 黒褐色土(10YR3/2)土器含む。

第21図 SI5

2.1 m、2.0 mである。

住居中央には石囲炉が造り付けられている。東側はSD 1によって流失しているため、全形をとどめないが、3石で逆L字状に組まれたものを検出した。本来は口字状に方形に組んだものと推定される。石囲炉の規模は、内法で長軸0.45 m、短軸0.3 m程度と推定される。使用石材は、扁平で緻密な

曜石剥片S 4、閃緑岩製磨製石斧S 5、安山岩製の台石S 6がある。炉跡上面では、先述した粗製深鉢19がある。磨製石斧S 5は細身で両端に刃部をもつもので、祭祀用と考えられる。台石S 6は、表面が磨かれている。

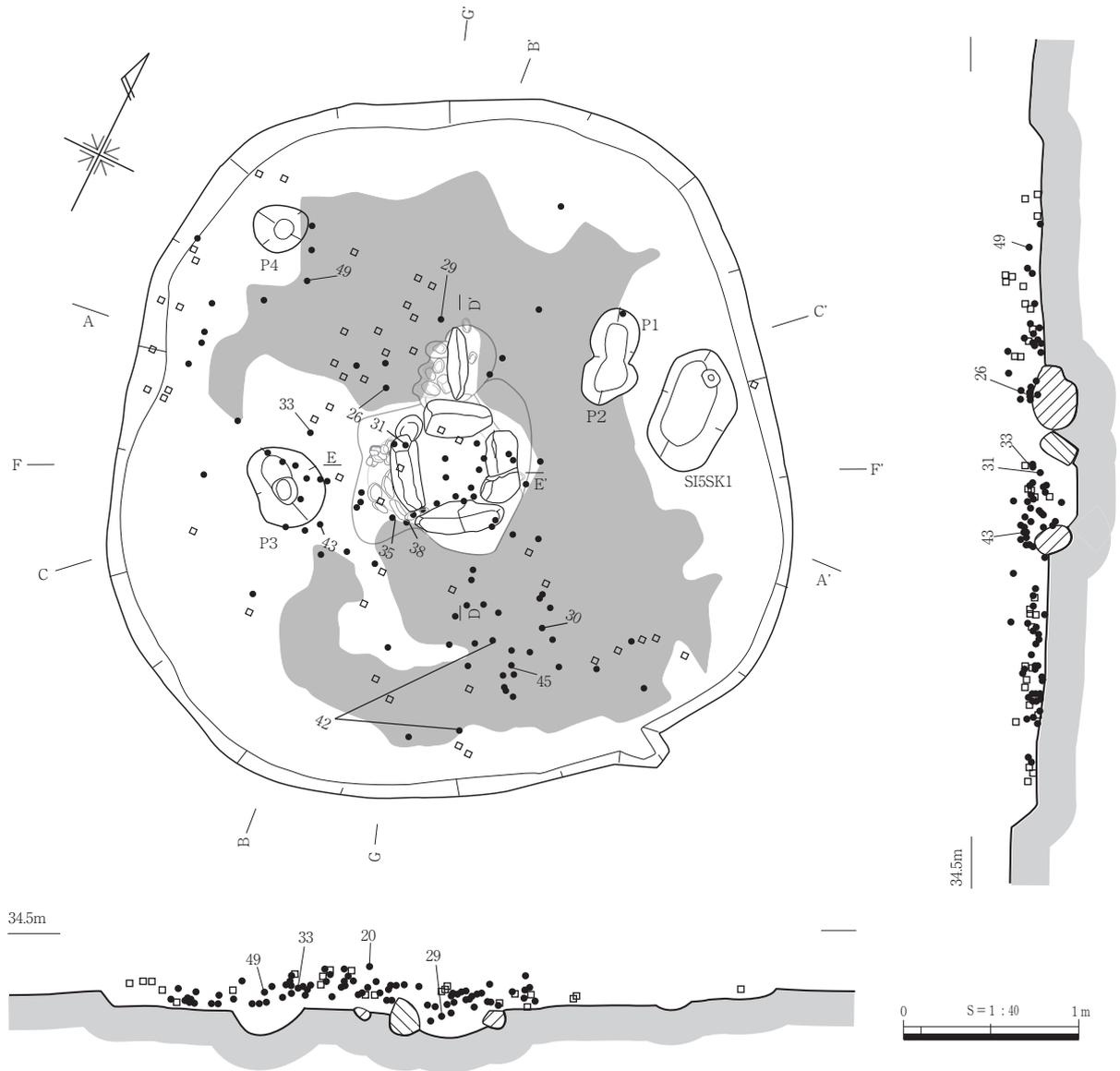
出土遺物から、五明田式併行期(中津・福田K II式土器様式第3様式古段階)、縄文時代後期初頭ごろのものと考えられる。

SI4 (第20図、表4、PL. 16・17)

1北東調査区際のC 2グリッドにあり、標高34.3 m付近の平坦面に立地する竪穴住居跡である。後述する弥生時代後期の自然河川SD 1によって削り取られており、SD 1埋土を除去した後に床硬化面と石囲炉を検出したことで認識したものである。西側0.5 mにはSK 5が隣接している。西側約3 mにはSI 5がある。床面は1 - VI層まで掘り込まれている。

弥生時代後期の流路SD 1によって周壁が流失しており、平面形、規模ともに不明であるが、床硬化面の範囲は、長軸4.0 m以上、短軸2.0 m以上を測る。

主柱穴は、確認した範囲ではP 1 - 3の3基であるが、本来は4ないし5本柱であった可能性がある。柱穴の深さはさほど無く、底面の標高は33.7 ~ 33.8 mに収まる。柱穴は平面に比べて底面が狭く尖り気味となっている。これは、遺構基盤層が礫を含む1 - VI層及び1 - IX層であることから、柱穴を深く掘り込めなかった結果と考える。主柱穴間距離は、P 1 - P 2間から順に、



第22図 SI5 遺物出土状況

安山岩垂円礫である。石材の一部に、被熱により剥離したと考えられるものがある。これらの石材は、付近を流れる下市川及び周辺から持ち込まれたものと考えられる。炉の掘方は、長軸 1.0 m 以上、短軸 1.0 m、深さ 0.14 m を測り、裏込め土は砂礫を含む暗褐色土が単層で入る。

P 2 及び石囲炉掘方埋土から縄文土器片が出土しているが、図化はできなかった。

明確な時期を示す遺物が出土していないが、他の石囲炉をもつ竪穴住居跡は五明田式併行期（中津・福田 K II 式土器様式第 3 様式古段階）ごろのものであることから、当遺構についても、同様に縄文時代後期初頭ごろと考えられる。

なお、P 2 埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、試料名 1769（測定番号 IAAA-112337）は補正測定値 $3,890 \pm 20 \text{ yrBP}$ という値であった。この数値は概ね縄文時代後期初頭ごろに相当すると考えられ、住居の形態的特徴も時期的に符合すると考える。

表5 SI5ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P 1	30△×27-20	
P 2	30×26△-19	主柱穴
P 3	47×39-20	主柱穴
P 4	32×27-19	
SI5SK1	70×40-12	

SI5 (第21～24図、表5、PL. 18～21・36・59)

1区北東側のB2・3、C2・3グリッドにあり、標高34.1m付近の平坦面に立地する竪穴住居跡である。1-V層掘り下げ中に遺物が集中して出土した箇所に、土層観察用のベルトを設定し掘り下げることによって確認した。検出面はVI層であるが、本来は1-V層中から掘り込まれたものである。東側約3mにはSI4がある。

平面形は不整楕円形を呈し、長軸4.0m、短軸3.8mを測る。深さは最も遺存状態のよい西壁で0.1mである。床面積は、11.5m²である。壁溝は検出されなかった。

主柱穴は、P2・3の2基である。ピットの規模は径30～50cm程度、深さは20cm程度と浅く、底面の標高は33.8m程度で、1-IX層まで掘り込まれている。特にP3の底面は尖底となっている。これは、遺構基盤層が礫を含む1-VI層及び1-IX層であることから、柱穴を深く掘り込めなかった結果と考えられる。P1・P2は、切り合い関係は不明であるが重複しており、建て替えられた可能性がある。P4については、用途は不明である。主柱穴間距離は、2.0mである。

住居中央には、石囲炉が造り付けられている。扁平で緻密な安山岩垂円礫3石と角閃石安山岩の垂円礫1石を口字状に方形に上端を外側にやや傾けて組み合わせ、隅の部分的な隙間部分を酸性安山岩の円礫で補填している。石囲炉の規模は、内法で上縁部長軸0.55m、短軸0.45m、底面長軸0.35m、短軸0.34mを測る。底面は1-IX層まで掘り込まれ、基盤の礫層が見えている。石材のうち緻密な安山岩は、被熱により赤変又は破損している。石囲炉の掘方は、不整な長方形を呈し、長軸0.85m、短軸0.75m、深さ0.12mを測る。裏込め土は、暗褐色土が単層で入り、石材固定のためと思われる安山岩小円礫を詰めている。

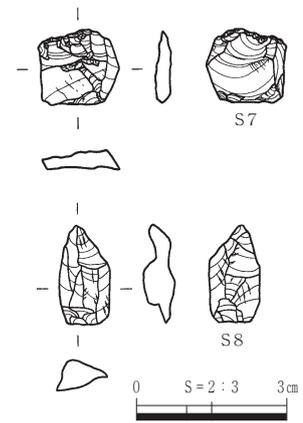
石囲炉の北側には、扁平で緻密な安山岩垂円礫が石囲炉辺に対して直角に立てられ、床面からおおよそ10cm立っている。この石材にも掘方が認められ、石囲炉と同様安山岩小円礫を詰めて固定していることから、当初からこの位置に設置されたものと考えられ、石囲炉に付属するものと考えられる。これらの石材は、下市川及び周辺の基盤層に含まれているものと同質であることから、近辺から採取したものと考えられる。

床面には、壁際、石囲炉掘方、柱穴、土坑周辺を除いて、6層による硬化面がある。平坦ではなく凹凸がある。床面西側は硬化面が発達していないことから、網代状のものが敷かれていたものと考えられ、硬化しにくかったものと考えられる。

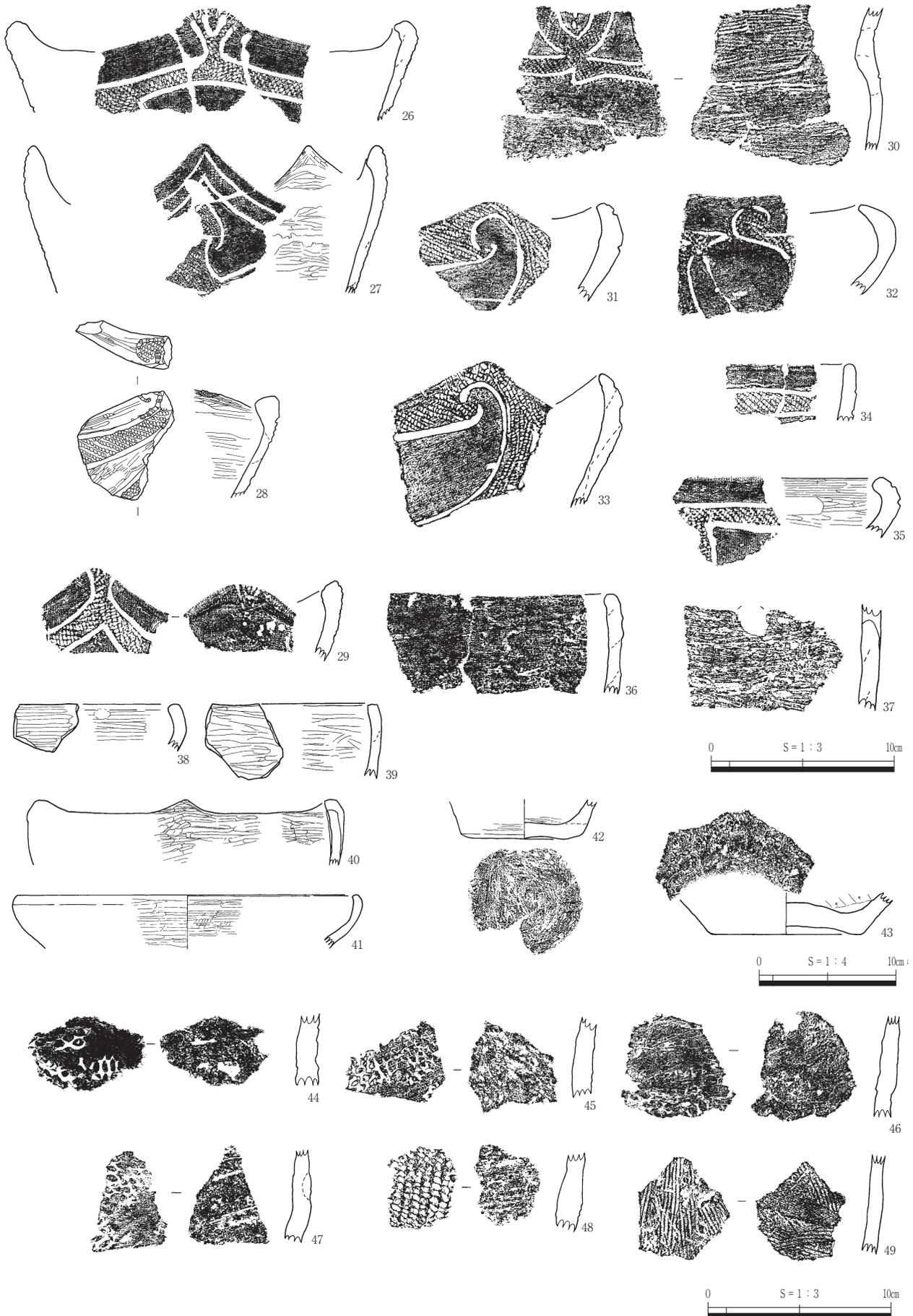
床面東壁際には、土坑SI5SK1がある。平面不整長楕円形を呈し、長軸0.72m、短軸0.4m、深さ0.12mを測る。1-VI層由来のにぶい黄褐色土が単層で入る。底面はほぼ平坦である。性格は明らかではない。

埋土は、暗褐色から黒褐色の4層に分層できた。2・3層には炭化物がわずかに含まれている。

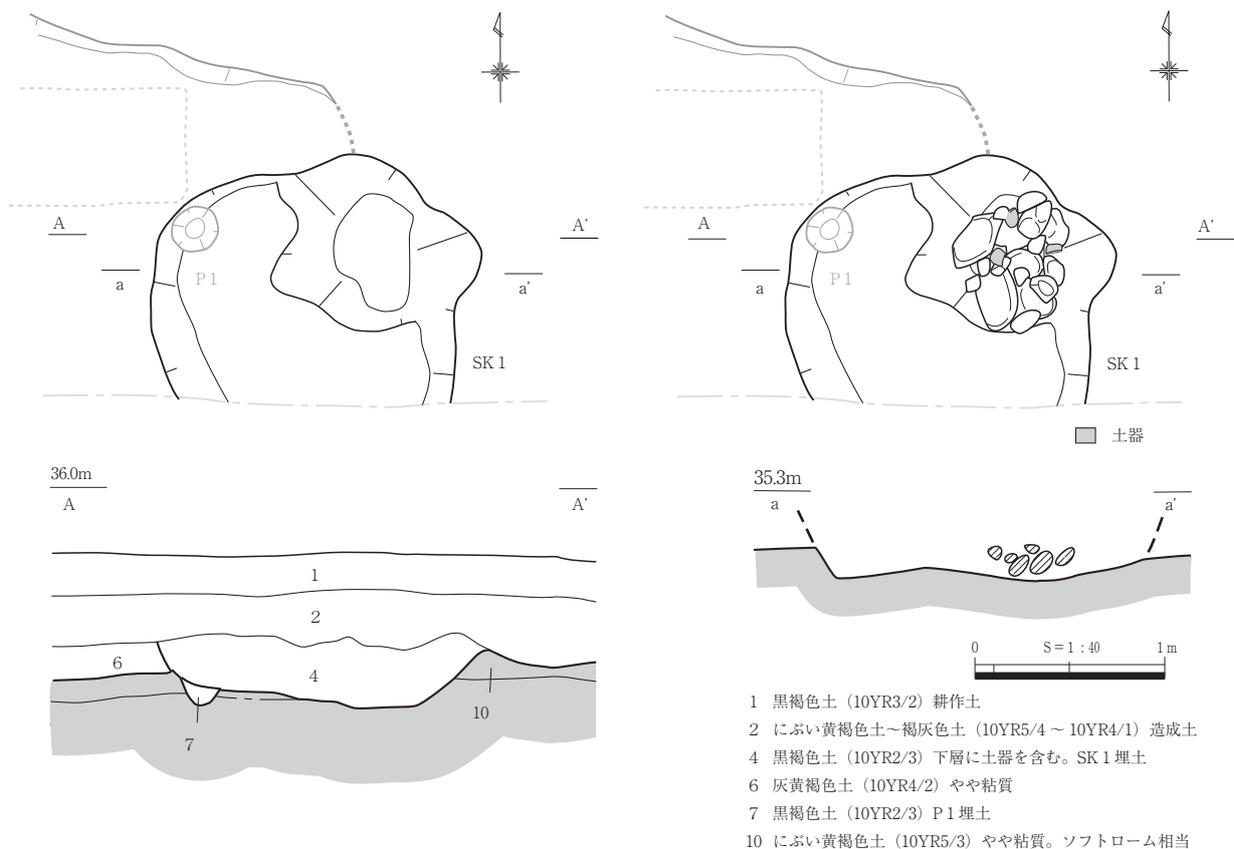
出土遺物は、埋土中から自然礫とともに多量の縄文土器とわずかの石器が出土した。図化したものは、埋土下層出土の有文精製深鉢26・29・31・33・34、有文精製浅鉢30・35、無文精製深鉢39・40、無文精製浅鉢38・41、底部42・43、ポジティブ楕円押型文深鉢片44・47、内外面条痕地の深鉢49、埋土上層出土の有文精製深鉢27・28・32、無文粗製深鉢36・37、無文精製浅鉢39、無文精製深鉢40、ポジティブ楕円押型文深鉢片45・46、縄文地の繊維土器深鉢片48、黒曜石製楔形石器S7・8である。



第23図 SI5出土遺物 (1)



第24図 SI5出土遺物(2)



第25図 SK 1

このうち、当遺構に伴うものは26～43で、その他は混入したものである。

有文精製深鉢・浅鉢は、五明田式併行期（中津・福田 K II 式土器様式第3様式古段階）、縄文時代後期初頭ごろのものと考えられ、SI 5もこの時期と考えられる。

なお、住居埋土下層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、試料名1768（測定番号IAAA-112336）は、補正測定値 $3,930 \pm 20$ yrBP という年代値であった。この数値は、概ね縄文時代後期初頭ごろと考えられ、土器型式と符合すると考える。

3 土坑・土器埋設土坑

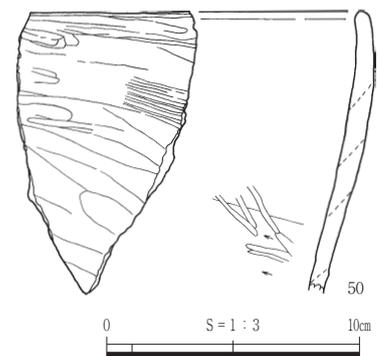
SK 1（第25・26図、PL. 22・37）

1区南東側のF 4グリッドにあり、標高35.0m付近の平坦面に立地する。造成土除去後の1～VI層上面で検出し、全体の半分程度は南側調査区外へ延びていることが判明した。西側は、SI 1を掘り込んでいる。

平面は不整な楕円形を呈すものと考えられ、長軸1.6m、短軸1.34m以上を測る。断面は、浅く丸みのある逆台形状を呈し、深さは0.3mである。

底面は不整形で、北側が5cm程度深く掘られ、この部分に角閃石安山岩小円礫が盛り上がるように置かれていた。

埋土は、基本的に黒褐色土単層である。中央部分は圃場整備段階で部分的に埋土が掘り込まれたものと考えられ、鉄分が沈着する暗褐色



第26図 SK 1 出土遺物

土が入る。

埋土中で、縄文土器が破片状態で出土した。図化したものは、内外面ミガキが施される無文精製深鉢50である。

深鉢50は、詳細な時期はおさえられないものの、内外面丁寧なミガキが施され、内湾するバケツ形の体部をもつこと、布勢式のSI1を掘り込み後述する集石1同様円礫が集積されていることから、縄文時代後期前葉ごろのものと考えられる。性格は不明であるが、集石1との関連性もあり祭祀遺構の可能性はある。

SK4 (第27・28図、PL. 22・38)

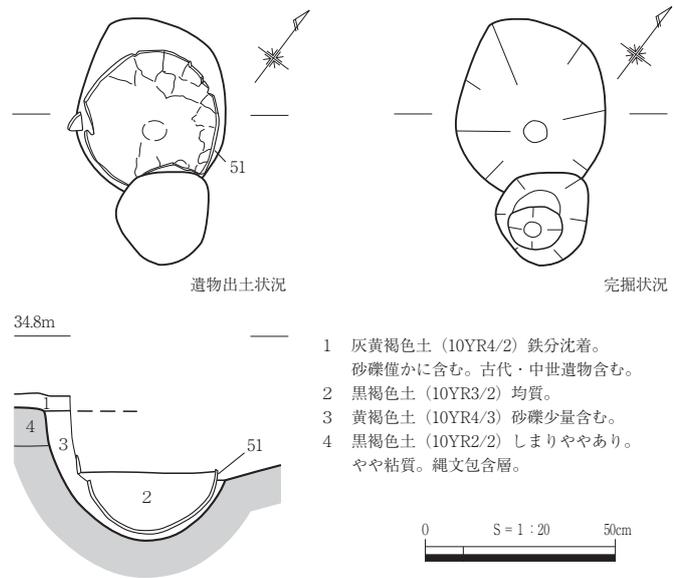
1区北東側のC2グリッドにあり、標高34.3m付近の平坦面に立地する、土器埋設土坑である。遺物包含層である1-IV・V層除去作業中に、1-V層上面で検出したが、本来は1-V層から掘り込まれたものと考えられる。北東側約3mにはSK5が、北側約4mにはSI5がある。

掘方の平面は楕円形を呈し、長軸0.45m、短軸0.39mを測る。断面紡錘形を呈し、深さ0.22mを測る。土器底部の形状に沿うように、掘り込まれたものと考えられる。

掘方埋土は、黄褐色土が単層で入る。

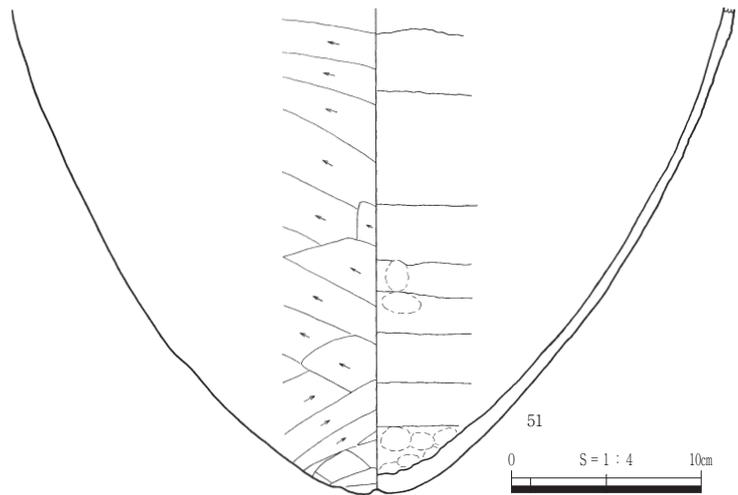
掘方内に、縄文土器無文粗製深鉢51が埋設されていた。体部上半はすでになく、下半のみ出土した。底部は尖底を呈す。南東側は中世と考えられるピットによって掘り込まれ、その際に土器の一部が欠損している。

出土土器の詳細な時期は不明であるが、体部調整の特徴及び尖底である形状から、突帯文土器様式、縄文時代晩期後葉ごろのものと考えられる。周囲には同時期の住居跡等の遺構はなく、単独で存在することから、土器棺の可能性が考えられる。



- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 鉄分沈着。砂礫僅かに含む。古代・中世遺物含む。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 均質。
- 3 黄褐色土 (10YR4/3) 砂礫少量含む。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) しまりややあり。やや粘質。縄文包含層。

第27図 SK4



第28図 SK4 出土遺物

SK5 (第29図、PL. 23)

1区北東側のC4グリッドにあり、標高34.2m付近の平坦面に立地する。東側は後述するSD1に

第3章 1区の調査成果

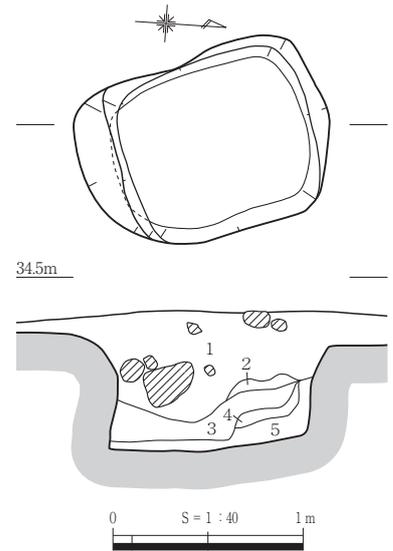
よって一部掘方が削り取られている。1 - V層除去後の1 - VI層上面で検出した。南西側約3 mにはSK 4、北西側約3 mにはSI 5がある。

遺構の東側上半がSD 1によって削り取られているが、平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.17 m、短軸0.94 mを測る。断面は長方形を呈し、一部フラスコ状にオーバーハンクしている。深さは最大0.52 mを測る。底面も隅丸長方形を呈し、ほぼ平坦で、長軸1.0 m、短軸0.88 mを測る。底面はIX層まで掘り込まれていた。

埋土は、5層に分層できた。概ね黒褐色土系と黄褐色土系の埋土が互層状に堆積している。いずれの層も礫を含むが、特に1層には砂礫や大型礫を多量に含む。2層以下が自然堆積した後、洪水等により1層が自然堆積したものと考えられる。

埋土中から粗製縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から縄文時代後期から晩期ごろと考えられる。性格は不明であるが、他の土坑に比べて深く、貯蔵穴であった可能性がある。



- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 砂礫・大型礫を含む
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 砂礫を含む。
- 4 灰黄褐色土 (10YR4/2)
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) 砂礫を含む。

第29図 SK5

SK6 (第30図、PL. 23)

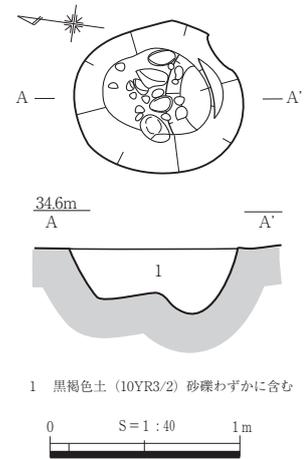
1区北東側のD 2グリッドにあり、標高34.4 m付近の平坦面に立地する。1 - V層除去後の1 - VI層上面で検出したが、本来は1 - V層中から掘り込まれたものと考えられる。西側約1 mにはSK16がある。

平面は楕円形を呈し、長軸0.88 m、短軸0.8 mを測る。断面はボウル状を呈し、深さは0.28 mを測る。底面は1 - IX層まで掘り込まれ、礫が見えている。不整楕円形を呈し、長軸0.49 m、短軸0.48 mを測り、南側がわずかに窪む。

埋土は、砂礫をわずかに含む黒褐色土が単層で入る。

埋土中から粗製縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から縄文時代後期から晩期ごろと考えられる。性格は不明である。



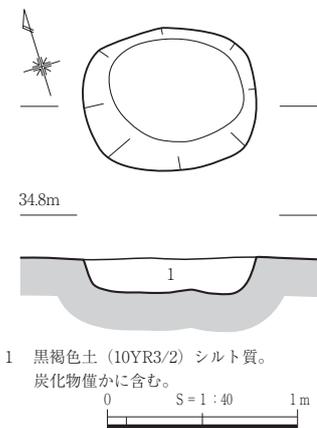
- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 砂礫わずかに含む

第30図 SK6

SK7 (第31図、PL. 23)

1区中央北側のB 6グリッドにあり、標高34.6 m付近の平坦面に立地する。造成土後の1 - VI層上面で検出した。東側約2 mにはSK12がある。

平面は不整楕円形を呈し、長軸0.9 m、短軸0.75 mを測る。断面



- 1 黒褐色土 (10YR3/2) シルト質。炭化物僅かに含む。

第31図 SK7

は浅い皿状を呈し、深さは最大0.14 mである。底面は不整楕円形を呈し、長軸0.67 m、短軸0.54 mを測り、ほぼ平坦である。1 - VIII層まで掘り込まれる。

埋土は、炭化物をわずかに含む黒褐色土が単層で入る。

埋土中から粗製縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、出土遺物から、縄文時代後期から晩期ごろと考えられる。性格は不明である。

SK 9 (第32図、PL.23)

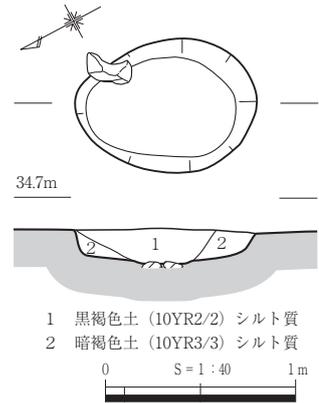
1区中央北側のC7グリッドにあり、標高34.5 m付近の平坦面に立地する。造成土除去後の1 - VIII層上面で検出した。南東側約3 mにはSK11がある。

平面は長楕円形を呈し、長軸0.97 m、短軸0.72 mを測る。断面は浅い台形状を呈し、深さは最大0.17 mである。底面は長楕円形を呈し、長軸0.88 m、短軸0.54 mを測り、ほぼ平坦である。1 - IX層まで掘り込まれる。

埋土は、暗褐色から黒褐色系の2層に分層できた。2層は三角堆積しており、自然堆積したものと考えられる。

埋土中から粗製縄文土器片が出土したが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から縄文時代後期から晩期ごろのものと考えられる。性格は不明である。



第32図 SK 9

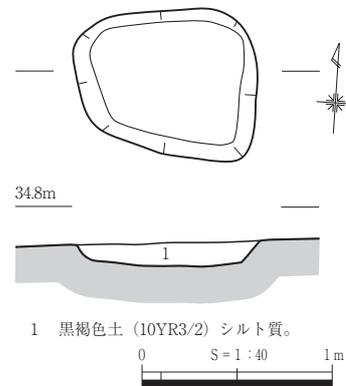
SK10 (第33図、PL. 23)

1区中央北側のC7グリッドにあり、標高34.6 m付近の平坦面に立地する。造成土除去後の1 - VIII層上面で検出した。西側約3 mにはSK11がある。

平面は不整隅丸方形を呈し、長軸0.97 m、短軸0.78 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さは最大0.15 mである。底面は、不整隅丸方形を呈し、長軸0.8 m、短軸0.59 mを測り、ほぼ平坦である。1 - VIII層まで掘り込まれる。

埋土は、シルト質の黒褐色土が単層で入る。

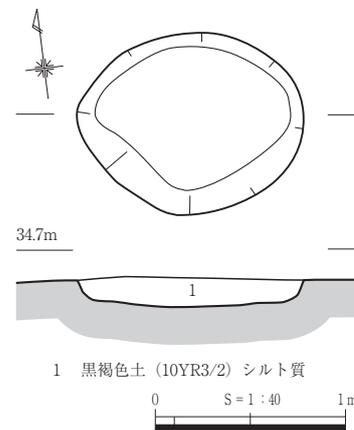
遺物は出土していないが、周辺の遺構の状況から縄文時代後期から晩期ごろのものと考えられる。性格は不明である。



第33図 SK10

SK11 (第34図、PL.24)

1区中央北側のC7グリッドにあり、標高34.5 m付近の平坦面に立地する。造成土を除去した後の1 - VIII層上面で検出した。北側約3 mには、SK 9がある。



第34図 SK11